

仲 原 正 治 のまちある記

アートでまちづくり編



「フライング・ダッチマン」フロリアン・クラール作

横浜トリエンナーレ 2008 に併せて、みなとみらい 34 街区（現マークイズ）にて

目次：横浜黄金町 売買春からアートの町へ	2 P～
「別府八湯」オンパクと混浴温泉世界	16 P～
松山市 いで湯と城と文学のまち	28 P～
越後・妻有と横浜 文化芸術でまちづくり	38 P～

1) 横浜・黄金町 売買春からアートの町へ

横浜では、子供の頃に、絶対立ち入ってはいけないと厳しく言われていた地区がある。それが黄金町地区だ。夜になるとピンクのネオンが輝き若い女性が道で客引きもする、そんな街の状況が戦後から 2005 年まで続いていた。この街が、劇的な変化を遂げている。今回は、筆者も一緒にまちづくりに参加している、戦後の混乱期から横浜の負の資産を抱えてきた街—黄金町地区を取り上げる。

★米軍の接收がこの街を変えた

黄金町地区が横浜の歴史に登場するのは、江戸時代の初期、1650 年頃である。現在の横浜の中心地となっている関内関外地区の骨格を作った吉田新田の埋め立て事業から始まる。むろん、それ以前から近くに鎌倉街道は存在しており、京浜急行黄金町駅近くの赤門町にある東福寺は太田道灌が中興の祖と言われている。

現在の大岡川と中村川に挟まれた地域（関内・関外地区）は昔、海だった。この地区を埋立て、できたのが吉田新田で、江戸時代末期まで、田畑として利用されていた。1859 年横浜開港に伴い、越前福井藩により、この地域に太田陣屋が建てられ、幕末期の治安維持等に利用された。この陣屋も 1866 年にはフランス式三兵（歩兵・砲兵・騎兵）の伝習所となっている。この時期、大岡川河畔に湧水があったため、飲料水を求め、船の行き来が多かった。現在もその名残があり、1 年中途切れることのない湧水が湧き出ている。

明治になると、鉄道路線からは若干離れていたが（初代横浜駅（現桜木町駅）から約 1 km）水運の発達により、この地域に材木商や問屋、オルガン工場等が進出してきた。1913 年（大正 3 年）には路面電車がこの地域を走り、鉄道駅との時間距離が格段と短くなった。

しかし、1923 年の関東大震災（M7.9）は、横浜の中心市街地を一瞬の内に崩壊させた。市街地の 80%が罹災し、33,000 人が死亡・行方不明という、日本の近代史で最大級の災害となった。この地区も震災と火事でほとんど壊滅し、その後の区画整理事業により、現在とほぼ同じ形での道路などの骨格ができています。

震災復興での大きな出来事は、京浜急行電鉄の品川・浦賀間が全線開通したことである。京浜急行の前身は、1899 年（明治 32 年）大師電気鉄道（株）として六郷橋～大師までの 2 km の営業から始まっている。同年、京浜電気鉄道（株）に社名変更したが、その後、1904 年（明治 37 年）に品川に乗り入れ、05 年には川崎・神奈川間、1930 年（昭和 5 年）には品川・横浜間が開通した。一方、三浦半島方面では、湘南電気鉄道が 1930 年黄金町・浦賀間及び金沢八景・湘南逗子間を開通させ、翌 31 年（昭和 6



吉田新田埋立て関係図
埋立て前
(資料：横浜市)



吉田新田埋立て関係図
埋立て後
(資料：横浜市)

年)に黄金町から日ノ出町まで延伸させた。同時期に、京浜電気鉄道が横浜から日ノ出町まで延伸させ、品川と浦賀が一直線に繋がり、33年に直通運転が開始されている。1941年(昭和16年)にこの二つの鉄道会社が合併し、現在の京浜急行電鉄となった。

京浜電気鉄道は横浜と品川を結ぶ旅客電車を中心だったが、湘南電気鉄道は、横須賀に海軍(鎮守府)があったため、軍主導で作られたことは否めない。金沢八景近辺の土地所有者と話しをしていると、昔、海軍が来て、鉄道を通すので、田畑を安く売るように言われたという証言がある。不思議なことは、京浜急行の軌道幅は国鉄(現JR)と異なり世界標準軌道となっていて、新幹線と同じ軌道幅だ。また、横浜駅から黄金町を経て、南太田駅までは当初から高架となっている。なぜ、こうした投資をしたのかは謎だ。標準軌のため、京浜急行の電車のスピードは速いが、JRなどとの乗り入れは難しくなっている。

昭和20年(1945)の横浜大空襲は横浜のまちづくりを大きく変えた。関内地区の中心部はほとんどが焼け野原になり、そこが、約7年間米軍の接收地となってしまった。黄金町地区のまちの悲劇はそのときから始まっている。それまで問屋が多かった地域に、伊勢佐木町地区の接收で追い出された人々が京浜急行高架下を借りて商売を始めたのである。大岡川を隔てた伊勢佐木町に米軍のカマボコ兵舎が建ち並び、多くの米兵が行き来するようになると、黄金町地区で麻薬やヒロポン、拳銃の密売、そして売買春が行われるようになる。昭和30年代には黒澤明の映画「天国と地獄」のモデル地区となってしまうほどだった。

その後、麻薬やヒロポン、拳銃の密売については、規制が厳しくなくなっていったが、違法な売買春だけは、しっかりと根を張って残ってきた。



関東大震災直後の横浜関内地区・塔は横浜開港記念会館
(写真：横浜市提供)

右：昭和20年代前半の関内・関外地区、左側を流れる川は大岡川、手前には米軍のカマボコ兵舎が並ぶ
(写真：横浜市提供)



仲原正治

の

まちある記

左：昭和 30 年代頃の黄金町地区・高架下にも店が並んでいた。
(写真：竹内好夫氏提供)

右：工事中の同場所、高架下は耐震補強工事の仮囲い
撮影：2012 年 1 月 10 日



阪神淡路大震災で高速道路の橋脚が倒れた。
撮影：1995 年 5 月



地震で 6 階部分がつぶれた神戸市役所
撮影：1995 年 5 月

★阪神淡路大震災により、売買春宿が加速度的に拡大する

この町のもうひとつの大きな転機は 1995 年の「阪神・淡路大震災」だ。このとき阪神地区では高速道路の高架橋が傾いた事例が生じた。これを受けて、建設省は、全国の高速道路、鉄道の耐震補強を指導した。その一環で、昭和 6 年に作られた黄金町地区の京浜急行の高架橋も耐震補強を始めることになった。耐震補強するには、高架下の店舗を退出させなければならない。そこで、京浜急行は保証金を出し、近くに代替地を用意した。2002 年ころから、この代替地にコンパクトでシステム化された売買春宿（地元では特殊飲食店と呼んでいる）が次々に作られていき、震災前までは 70 件程度だったものが、250 軒を超える数の特殊飲食店が作られていった。1 店舗約 25 m²、2 階建て、1 階に簡易なスナック、2 階に 2 室の部屋。ここで売春が行われていた。

そこには 500 人以上の東南アジアや中南米の女性が連れてこられて客を取らされるという構図ができた。飲食店といっても、何か飲ませるというのではなく、2 階に上がり、すぐに 30 分とか 1 時間の女性のサービスだ。週末には、その部屋が一日何回転も利用されていたというのが現状だ。また、夜だけではなく、朝から営業していて、近くの通学路には P T A の方が毎日のように付き添いで通学する集団登校という状況が続いた。私の女房が近くの東小学校に勤めていた時に、朝、自動車で送りに行ったりするとき、信号で停まって横の道を見ると、ミニスカートで肌もあらわな女性がこっちを見て何となく手招きすることもあった。女房が朝の通勤で近くを通ると、ある日、髪の毛を持たれて引きずりまわされている女性がいたと、そのような場面もいっぱいあった。

これを取り仕切っていたのは暴力団で、年間数億円の収入が暴力団に流れていったといわれている。2005 年頃には暴力団事務所は 2 箇所あり、2016 年現在も暴力団事務所は 1 箇所存在する。

その後も、高架下だけではなく、普通の民家も地上げ屋によって狙われ、多くの売春宿が生まれた。約 25 m²の店は売買の取引にもなっており、1 軒が 2-3,000 万円



1階がスナック仕様で、ここで、交渉して2階に上がる。
撮影：2005年12月11日



取り締まりの後に、2階の部屋に入ると、当時のまがが残っていた。ここで買春が行われていた。

撮影：2007年11月21日

で売り買いがされたようだ。持っている人は売買春宿として貸すと、月 70 万円ほどの家賃収入が入ったということで、投資にもなっていたようだ。

この区域は、日ノ出町、初音町、黄金町の3つの町からできていて、町内会としては日ノ出町町内会と初黄（はつこう）町内会の二つがあった。この町を、どうにかしようと立ち上がったきっかけは、右からも左からも特殊飲食店ばかりになり、地上げ屋からはいつでも土地を買いますからと脅され、この町から出て行こうと決意した住民が、日ノ出町町内会長に相談することから始まった。

2003年（平成15年）11月に地元では、町内会役員、近隣の東小学校PTA役員を中心に「初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会」が発足した。初音町、黄金町、日ノ出町地区の京浜急行線の沿線約500mにわたって存在する違法特殊飲食店をなくして、「普通のまち」にしたいという願いだった。

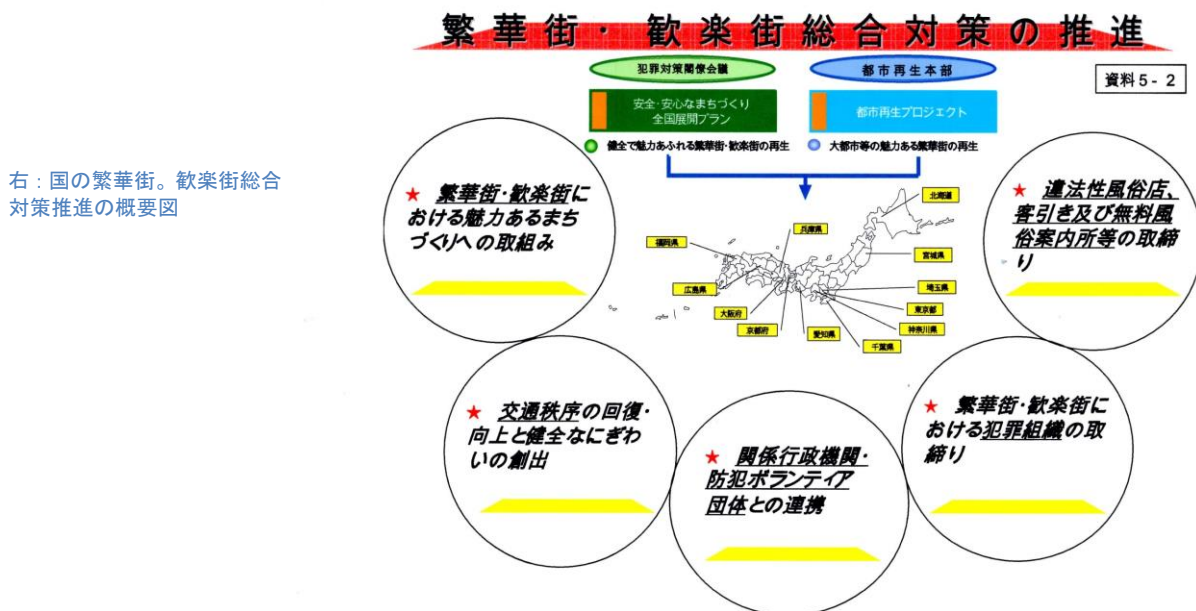
2004年7月には、売春防止法の罰則強化、不法滞在者の取り締まり強化について法務大臣に要望書を提出し、11月には警察庁長官が現地視察をし、県警本部長が「開港150周年までに売春店舗撲滅」を宣言するということになった。この背景には、国連やユネスコで日本では日常的に「人身売買」が行われていると何回も指摘され、政府としても何らかの対策をとらなければいけないという事情があった。

神奈川県警は「歓楽街総合対策推進本部」を設置し、2005年1月11日に警察・行政・地元が一体となって「バイバイ作戦」を開始した。違法特殊飲食店に立ち入り、売買春をしている人を一斉に逮捕し、所有者、使用者に対して売買春の禁止を明確に示した。この取締りでは、何人かの逮捕者を出し、関わっていた外国人女性はすべて、身元を調べられ、滞在期限を過ぎた人には国外退去を命ずるなど、徹底した取締りが行われた。そして、警察は取締りの日から24時間365日体制の監視・巡回を始めた。その日から違法な商売はできないし、居住場所でないので住む人もいない、ゴーストタウンとなっていき、立ち番の警察官がところどころにいるだけの街となった。2005年4月には京浜急行高架下に「歓楽街総合対策現地指揮本部」を設置し、常時8人体制で、365日24時間体制で地域の見回りを始めた。

その後、県知事、国家公安委員長が現地を視察し、2005年6月に国では「都市再生本部、犯罪対策閣僚会議合同会議」が開催され、都市再生プロジェクト「防犯対策等まちづくりの連携協働による都市の安全・安心の再構築」のモデル地区として、関内・関外地区が指定された。大都市等の魅力ある繁華街の再生を進めるため、新宿歌舞伎町をはじめとして薄野（札幌）、池袋、澁谷、六本木（東京）、関内・関外（横浜）、栄周辺（名古屋）、木屋町周辺（京都）、ミナミ（大阪）、流川・薬研堀（広島）、中州（福岡）の全国で11箇所を指定し、それぞれの実情に応じたモデル的な取り組みを進めることが決定された。

取り組みの基本は、次の二つだ。

- ① 客引き、広告、駐車等に係る迷惑・違法行為の排除、未然防止の徹底及び死角の除去、街の美化、外国人観光客を含む来街者への地域安全情報の提供
- ② 地域特有の資源や文化を活かし、それぞれの特性に応じた街の魅力づくりと情報発信、都市再生事業等による新たな賑わいと人の流れの巻き起こし、まちづくりビジョンと調和したテナントや商業・文化施設の整備等の誘導。が挙げられている。



こうした国の動きや県警のバックアップもあり、初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会では、7月には「まちづくり推進部会」を発足させ、2006年3月には「初黄・日ノ出町まちづくり宣言」を策定した。宣言では、

「子どもたちが夢や希望を持てるような、明るく、暮らしやすく、活力のあるまちづくり」を基本目標として、5つのビジョンを立てた。

- ① まちの個性「地域資源と人材ネットワークを活かし、チャレンジできるまち」
- ② にぎわい「アーティストやマイスターが集い、横浜を訪れる人々が回遊してくるまち」
- ③ 水とみどり「大岡川や野毛山の花やみどりや水を楽しめるまち」
- ④ コミュニティ「多様な世代が住み、子どももおとなも、日本人も外国人もみんなが顔みしりのまち」
- ⑤ 安心安全「犯罪や売買春のない、安心して暮らせるまち」

しかし、取り締まりがあってから1年くらいは、横浜市はまちづくりに関して何も手を付けることができなかった。当時は中区役所が単独で担当していたが、防犯

仲原正治

の

まちある記

という観点からは考えることはできても、まちづくり全体をどうするかの構想がなかった。そのため、防犯からという観点で旧特殊飲食店を借りて「防犯拠点」をつくることから始めた。防犯拠点といっても、誰かが常駐するのではなく、防犯機材を置いておくスペースなので、10㎡もあれば足りてしまう。とすると借りる家屋の大半は空き室になってしまうようになる。

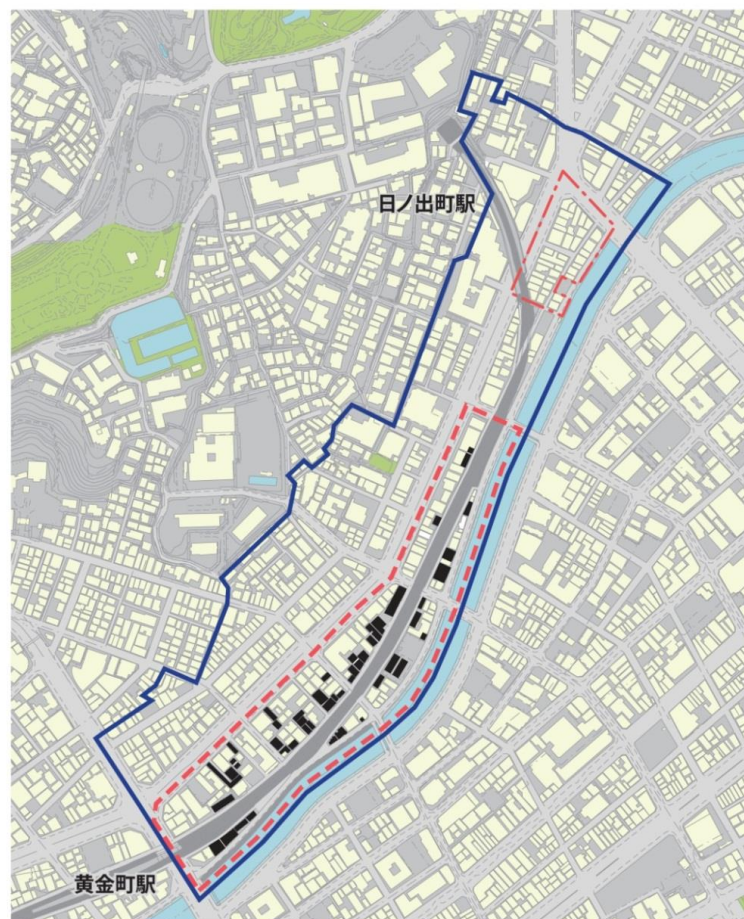
右：2005年頃の黄金町地区の
特殊飲食店分布図。
資料：NPO法人黄金町エリ
アマネジメントセンター



連坦する特殊飲食店連連単
テント看板が象徴的に連な
っている。
撮影：2005年12月11日



エイズ撲滅の看板：行政はこ
ういうことしかできなかった時代がある
撮影：2007年8月4日



特殊飲食店最盛期分布図



★アートの街への道しるべ

当時、横浜市では中田市政の中で、創造都市（クリエイティブシティ）政策に取り組み始めたところだった。アーティストやクリエイターを市内に呼び込み、創作、発表、滞在、活動することでオフィスの空室を減らし、空洞化しつつある中心市街地の活性化を図ろうというまちづくりだ。

当時、実験的に進めていた BankART1929 などのオルタナティブスペースにはたくさんアーティストやクリエイターが集まってきていた。それに目を付け、まずは、アートスペースをつくり、アーティストやクリエイターを集積させ、町の再生を進めようと考えた。キャッチフレーズは「売買春の街からアートの街へ」だ。

2008 年には横浜トリエンナーレが開催されることも決まっていたので、それをきっかけにまちづくりを進めようとする気運も出てきていた。しかし、地元住民にとってみれば、晴天の霹靂である。売買春の街を「普通の街」にしたいという思いでいるのに、今度は、地元にとっては未知のアーティストたちが街に入ってくるのだから。現代アートって何？という住民が多数なのだから、簡単には動かない。

横浜市は、安心安全のまちづくりのために、違法飲食店のひとつを借りて、地域防犯拠点「ステップワン」を 3 月にオープンさせ、防犯見回り拠点をつくり、大岡川沿いの道路プロムナード化事業や県による栈橋をつくる事業などハードの事業を進めてきた。しかし、街のイメージを変えるためにはなにが必要か、何ができるかを検討したが、なかなか良いアイデアが浮かばない。結局、実験的に芸術文化拠点を作ることを決め、中区役所だけではなく、都市整備局と創造都市事業本部も協働して、この町に関わることになった。

最初に、2008 年に行われるヨコハマトリエンナーレに向けて、すでに耐震補強工事の終わっている京浜急行の高架下にスタジオを作ることを進めた。専門の設計家は自分を主張しすぎ住民と対立する場面が予想されるために採用せず、設計は横浜国立大学建築都市スクールと神奈川大学の大学院生が行うことにし、横浜国大教授の飯田善彦氏と神奈川大教授の曾我部昌史氏にそのアドバイスをお願いした。

学生に対して住民はとても温かい目で見えてくれることもあり、建物の設計なので、住民一人一人が何らかの発言をできる機会を作ろうと考えた。現代アートはわからなくても建物ならば、トイレや台所などの設備や、街の歴史を語ることができるので、設計のワークショップは順調に進んだ。何回もの住民を入れたワークショップを開催したが、会議をするたびに参加者が増えていった。こうした学生との協働作業は、住民と行政の距離感を縮めることに繋がった。

また、街のアートディレクターとして、福岡市でミュージアムシティプロジェクトを進めていた山野真悟氏を迎えたことが、この街の「アートのまちづくり」に大きな貢献をしたと考えられる。彼が街とアートの翻訳者になることで、住民が少しずつアートの理解を深めていくことになる。当初、山野氏は、この町にアートが果たして根付くか悩んでいたと思われる。そのため、アートの捉え方を広くして、楽しく人を巻き込めるもので、アートの的なものはみんなアートと考えた。そして、トリエンナーレと同時開催するアートイベントの名前を「黄金町バザール」というアートとは縁のない名前を付けた。



神奈川大学チームのワークショップ風景

撮影：2007 年 7 月 11 日



横浜国大チームのワークショップ

撮影：2007 年 8 月 4 日

仲原正治

の

まちある記

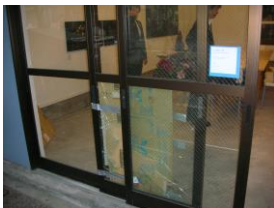
左上：黄金スタジオ(神奈川
大設計)の模型
撮影：2007年12月3日

右上：完成した黄金スタジオ
撮影：2012年1月10日



左下：日ノ出スタジオ(横浜
国大設計)の模型
撮影：2007年12月3日

右下：完成した日の出スタジオ
撮影：2012年1月10日



事務所も扉のガラスが壊さ
れることがあった。
撮影：2009年3月13日

2008年頃は「売買春街」の復活を望む暴力団や一部の建物所有者がまだ勢力を誇っていた。県警と伊勢佐木署は24時間365日体制で街の監視を進めていたが、黄金町バザールの事務所も何回かガラスが割られるという事件も起きていた。横浜市はそうした中で、暴力団の紐付きでない権利者から旧特殊飲食店を借り上げる作戦を始めた。当初数軒の借り上げだったものが、10軒20軒と増えていき、借りた部屋を黄金町バザールの会場に利用していった。

2008年9月初旬、横浜トリエンナーレの開催に併せて、黄金町バザールが始まった。オープニングレセプションには、横浜市長、神奈川県知事、神奈川県警本部長とアートのイベントでは考えられないようなメンバーが、この町を語り、支援することを決意表明する。ようやく、まちづくりの一步を踏み出す時期が到来したのである。

左：市長、県知事、県警本部
長の3人が出席して行われた
黄金町バザール開会式
撮影：2008年9月12日

右：道路を利用して行った
開会式には、地元から多くの
人たちが参加した。
撮影：2008年9月12日



★NPO法人の設立でまちづくりの基盤をつくる。

黄金町バザールの開始の日に、次の作戦が始まった。それは地元と山野氏をリーダーとするアート関係者が一緒になり、この街を支えていくNPO法人を作ろうという動きだ。

黄金町バザールが始まるときに、ある程度の成功が見えていたこともあり、次の展開も考えていた。黄金町バザールを企画した段階でも、一緒に黄金町再生を進めている中区や都市整備局、横浜市大などからは、時期が早すぎるということを言われ続けてきた。地元はまだ、売買春の街のイメージを引きずっていて、そこに「アートのイベント」を入れるなんて、地元が付いてこないし、尚早だという意見が多数だった。しかし、事業本部という組織は、考えて立ち止まるのではなく、何かを行って、それを検証して次に進むものと考えていた。黄金町も実験的に進めたいという気持ちだった。しかし、この実験は地元との協働作業になるので、失敗は許されないと腹はくくっていた。事業本部長の川口良一氏も、事業本部で道をつけなければ、いつまでも変わらないので、何しろ速く進めろと言ってくる。市長にも報告して市長もそういっている。と励ますのか脅かすのかわからないが、事業本部が黄金町の再生を進めなければ、事業本部とは言えないと言われた。そういう背景も味方して、私が一直線に進めることについては、その後、市内部ではほとんど障害はなくなった。動き始めると、抵抗勢力も一緒に手伝ってくれるようになった。この間、私とそのスタッフは毎日のように黄金町に通い、地元の人やアーティスト、関係者と顔を突き合わせ、仲良くすることに努めている。こうして始まった黄金町バザールだが、次のステップは、地元にどのように定着させるかだ。そのため、黄金町バザール開催時には、閉会時に地元とアート関係や、手伝ってくれた大学関係者等で、NPO組織を作って、そこが全体の運営を進めていくことを考えていた。これについても、あまりにも性急だという意見があった。

NPOの中心は「初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会」の役員を考えていた。この協議会は定例の月1回のまちづくり部会その他、環境部会やイベント部会など、様々な部会を抱え、それを着実に進めてきた実績があり、この協議会と連携しなければNPO組織は成り立たない。そこで、協議会の副会長の小林光政、谷口安利、竹内一夫の3氏に相談して、横浜市が今後補助金を出していくためにも、NPOが必要で、その母体として協議会のメンバーが参加してもらいたい旨を相談した。3人とも、地元だけの活動では限界があることを感じていたこともあり、協議会に諮って、今後のことを調整していくことにした。当初、私としてはNPO組織の名称を「NPO黄金町バザール」というわかりやすい名前にしようと考え、提案していたが、小林氏が、イベントだけではなく、地域で全体のまちづくりを進めるという意



Issei MIYAKE 田宮麻呂氏のショップ

撮影：2008年9月11日



安部泰輔ワークショップ

撮影：2008年9月11日



鉄板焼き「ひがしのみそら」
現在境港市で「みそら」として営業中

撮影：2008年11月24日

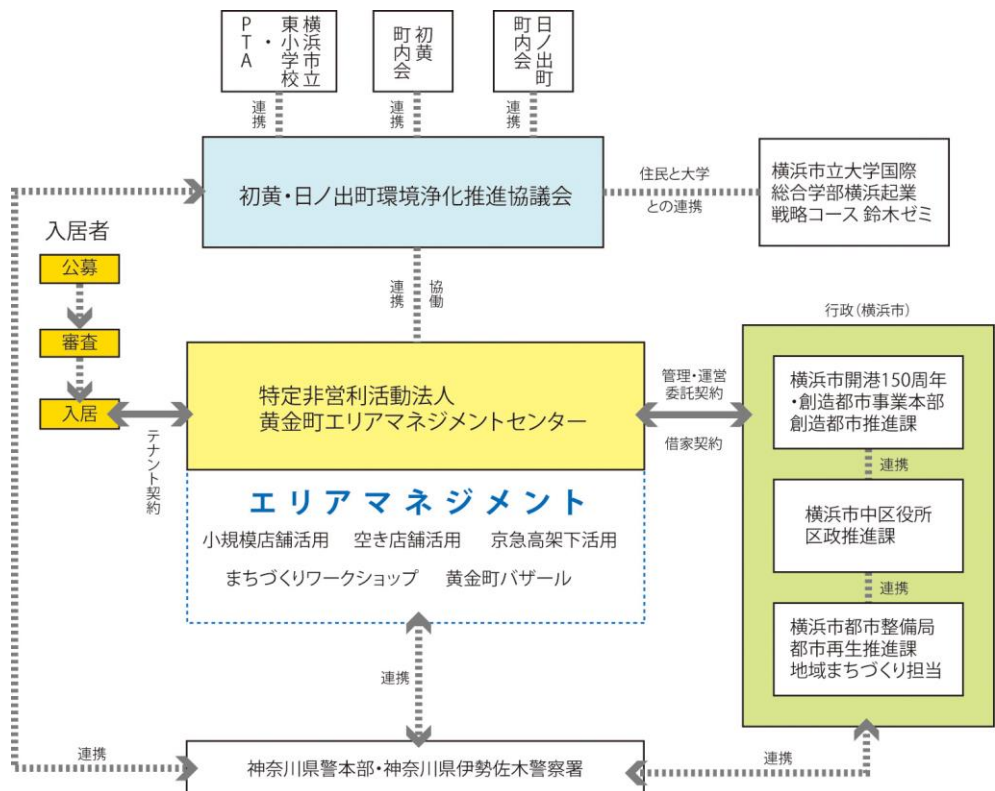


しでかすおともだちのパフォーマンス

味では「黄金町エリアマネジメントセンター」の方が、趣旨が明確になるという意見で、その名前に落ち着くことになった。

黄金町バザール最終日の 11 月 30 日には、NPO の発起人会が開かれ、2009 年 4 月 1 日に発足することが決められた。

横浜市としては、創造都市政策を進めるうえで、BankART や急な坂スタジオなどの「場」の提供に加えて、地域をターゲットに創造都市を推進するという黄金町地区にNPOができ、そこが窓口になるため、補助金等も出す対象が明確になるので進めやすくなった。



右：NPO法人と協議会や行政、警察、大学などとの連携図



黄金町バザール最終日に開催されたNPO法人の設立総会

撮影：2008 年 11 月 30 日

2009 年の 4 月 1 日にNPOが正式に発足したが、2009 年度は約 1 億 2 千万円の予算になっている。約 50%強は横浜市の補助金や委託費などに頼っている。横浜市が借りた高架下のスタジオや旧特殊飲食店を無償でNPOに貸し付け、アーティストやクリエイターに転貸するという構図だ。入居したアーティストたちは、地域のためにある程度の寄与が義務付けられると同時に、大学や地域とも連携をとって動く。また、NPO は警察との連携をして、安心安全なまちづくりを進めるという構図だ。そのため、テントの看板の撤去キャンペーンなども、地域と一緒に進めることになる。

こうしたことを進めていても、一方では空き室には「レンタルルーム」の張り紙が

仲原正治

の

まちある記

あり、貧困ビジネスの温床になりかねないような状況は続いていた。



買売春地域の象徴的な
アート看板の撤去作業
撮影：2013年2月20日



レンタルルームの表示。誰が
借りているのかわからな
いのが問題だ。
撮影：2012年1月17日

他の地域にしてみると年間1億2千万の予算を組んで、半分は市からの援助ということで、手厚すぎるという声も聴かれる。しかし、文化芸術の振興を進めている区民文化センターの補助金は1館について1億円以上となっている。これは指定管理者制度で決めているので、その額は毎年ほとんど変わらない。黄金町という面的に展開している場所で、補助金が5千万程度というのは、区民文化センターの1館に満たない額で、地域の文化の掘り起こしをし、町のイメージを変えているということを見ると補助金の額は多いとは言えない。

こうした文化芸術によるまちづくりの活動を、2007年から続けてきて何が大きく変わったかという、まず、地域の人達や近隣の人達が、「昔は怖くて立ち入れなかった場所をふつうに散歩できるようになった」という意見に集約されるように「ふつう」に近い街になったということだ。また、今までこの地域で開発したマンションには「伊勢佐木町北〇〇マンション」のような名前で、「黄金町」という地名は付けていなかったが、最近では「黄金町レジデンス」というようなマンション名になり、その宣伝文句は「アートの町、黄金町」とチラシなどにも記載しはじめ、すぐに物件が完売するようになったことだ。

また、地域のごみ関係についても、最初の頃には、勝手に路上に放置してしまっていて、毎日のごみとの戦いのような時期もあったが、環境事業局の指導や地域の監視もあって、普通の町と同じ水準に近くなってきている。

こうした活動を進める中で「アートのまち」なのだから、毎日いろいろな人が来て、賑やかになるはずだ、横浜市はこんなに補助を出しているのだから、もっと町が活性化して良いはずだという意見を行政側から聞くことがある。間違っただけいけないのは、黄金町は商店街でもなく、観光地でもないということだ。

まだまだ、発展途上で、飲食店や物販の店は定着する要素がない。近くには伊勢佐木町もあるし野毛地区もある。そうしたまちとは全く性格が違うということだ。私はこの地区でギャラリーをオープンさせたが、平日の昼間はあまり人通りがない。土日祝日も黄金町バザールを開催していない時期には「なんて人出が少ないのだろう」と思う。特に夏の暑い盛りや厳しい冬には人出はもっと少なくなる。

考えてみると、この街には「アーティスト・クリエイター」のスタジオなどがあり、そこで活動しているが、そこはある意味では職人の町と同じで、買い物客が来るわけではなく、観光客がいつも来るわけではなく、普通に生活している人が普通に来ているという状態なので、人が少ないのは当たり前だ。

人がたくさん来ているから活性化しているという尺度自体が間違っていると言わざるを得ない。そうした指標ではなく、先ほど話したように、「普通に散歩できるようになった」という一言が大きな成果なのだ。これから先、たぶんもっと多くのアーティストたちが活動して、この地域の性格を変えていくことになるだろう。それは、彼らの見えない活動を通してであり、たぶん、見えるのは黄金町バザールの時と、月に1回のワンデイ・バザールの時でしかない。

最近、地域の近くに洋菓子店ができています。このカフェには地域の人も集まっている。まちのイメージを変えたことで、こうした商売が成り立って行く、これこそが成果の一つだと思う。

まちづくりは、NPOだけが担うのではないし、地域や民間も担っていくことになる。次のステップは、京浜急行電鉄が耐震補強工事を終えたのちの高架下をどう活用していくかということだ。

京浜急行が中心になってNPOと協議をしながら、高架下に民間の企業をどの要因入れていくのかを真剣になって、検討する時期になっている。これについては、NPOだけではなく横浜市も京急との話し合いの中で、マスタープランのようなものを作っていくことが必要だ。

2009年、2010年と毎年秋に黄金町バザールは開催されている。2011年にはヨコハマトリエンナーレの連携事業として実施され、3ヶ月弱の期間に10万人に近い人がこの街を訪れた。しかし、黄金町バザールの開催時期には、多数の人が訪れるが、まだまだ平日の人出は少ない。そこには魅力ある飲食店も物販店舗もないから、当たり前と言えよう。

今は、毎月1回オープンスタジオを行い、アーティストのスタジオを開放し、野菜の直売などもしている。また、レジデンス事業では内外のアーティストが滞在し、作品製作をしている。特に力を入れていることは建物のコンバージョンで、古い建物(特殊飲食店)を改築し、そこにアーティストに入居してもらっているが、最近、多くの建築家が入居し活動を始めている。アーティストはアルバイトが忙しく来ないときがあるが、建築家は夜遅くまで電気をつけて仕事をしているので日常的な活気が見える。そうした活動を積み重ねているが、まだ、飲食店や物販は少なく、平常時の街の活気は見えない。クリエイターなどが活動するだけではなく、美味しい飲食店や魅力ある商品を扱う店ができ、観客や購買客が来るようなことが実現できるかが大きな課題となっている。

一方、街のイメージは一新している。以前は黄金町という名前を付けるだけで敬遠され売れなかったマンションも黄金町という地名を付けて販売するようになった。むしろ「アートの街・黄金町」を売り文句にしてマンション販売を始めている。少しずつ街が市民権を得てきた証拠でもある。もうひとつ変わったことは、NPOの



黄金町駅前にできたマンションには、堂々と「クリオ黄金町」と黄金町の名前が付けられている。

撮影：2012年1月10日



2011 年の黄金町バザールの
展示場所となった「竜宮旅
館」今は、再開発で取り壊さ
れた。
撮影：2012 年 1 月 17 日



大岡川と日ノ出町駅に間に
できた、再開発ビル。
撮影：2015 年 4 月 1 日



地域の入り口にある「らいむ
らいと」のオーナーも 2015
年暮れに亡くなった。路地裏
はまだ、あやしい雰囲気があ
る。

撮影：2015 年 12 月 19 日

活動に触発され、多くの住民が活動に参加を始めたことだ。住民は月に数回、まちづくりのワークショップに参加して、街のマスタープランづくりを進めている。当初発足した「初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会」は毎月 2 回の定例会と月 1 回の防犯パトロールを続けている。

こうした活動を進め、暴力団の姿も表面的には見えなくなっているし、売買春のイメージも消えてきた。街のイメージが変わってきたので、そろそろ、環境浄化推進協議会という名前は変えても良い時期になっているのではないだろうかと思う。環境浄化という言葉の持つ意味には、不浄なもののクリアランスなどの意味も含まれているようで、どうもなじめない。当初、暴力団の追放や売買春の撲滅をうたっていた時期はこのネーミングでも良かったと思うが、そうした時期は越えて本格的に「まちづくり」に着手している。名前を代える時期に来ていると思う。

★ まだまだ再生途中。でもよくここまで来た。

街で見る警察官の姿は、以前に比べて少なくなっていて、地域犯罪率は伊勢佐木署管内で一番低くなっている。昨年暮れの長期滞在のクリエイター、アーティストの入居説明会では 60 名以上の参加もあり、春には、飲食店や物販を含め、新しい入居者がこの街に滞在し始める。アートの街に向かって、着実に街が変わってきていることは確かなことだ。

しかし、現在の黄金町地区を歩いてみると、まだ、特色のあるテント型の看板は目立つし、怪しい雰囲気地域も残っている。飲食店も少なく、平日の昼は、どこに行ってもよいかわからない。いくつかの旧特殊飲食店のドアには、レンタルルームの張り紙も張られていて、そうした場所に身元不明の外国人等が入居している。いつ来て、いついなくなっているのかも不明だ。暴力団事務所も一箇所あり、今でもふつうに存在している。

まだ、なにか不思議な空気がこの街を支配している。言葉では表現しにくい、アートを中心にまちづくりを進めている地元や NPO とは反対に、まだまだ、この街で不正な動きで稼ごうとしている勢力が裏でうごめいている気配だ。昨年も貧困ビジネスや養子ビジネスなどの事件が付近で起こっている。この肌に感じる気配がいつなくなるのかは、まだわからない。

黄金町の人々が自分たちの力で進めていること、それは創造的な活動による街の再生だ。これに携わるアーティスト、クリエイター、地元、行政、大学、警察、いろいろな人が、目的に向かって街の再生プログラムを展開している。街はこうした人たちに支えられて動いている。まだ、まちづくりをはじめて 10 年間くらいしか経っていない街だが、よくここまで来たと思う。だが、あまり急ぎすぎることはない。60 年以上も積み重ねられてきた街の雰囲気は、5 年や 10 年で街が変わるはずがな

仲原正治

の

まちある記

い。ゆっくりと腰をすえて、目標に向かって、まちづくりを進めるしかない。それができる街だと思う。

毎月第2日曜日には、イベント「のきさきアートフェア」が行われる。4月第1週には「さくら祭り」、9月には「黄金町バザール」も開催される。時間ができたら、一度街を訪れることをお勧めする。

右：毎年恒例の桜まつりには、数万人の市民が訪れる。
撮影：2013年4月7日



2) 「別府八湯」 オンパクと混浴温泉世界

温泉が大好きな筆者だが、別府や熱海などの大規模な温泉にはプライベートではほとんど行ったことがなかった。昭和 40 年代頃までは、会社の団体旅行が盛んで、土曜日が半ドン（午前中は勤務、午後から休み）だったこともあり、土曜日の午後から熱海や箱根の温泉に繰り出して、ドンチャン騒ぎをするというのが年 1～2 回の行事で、ほとんどの職員が参加していた。1980 年代に週休二日制が普及し、バブル経済期以降は団体旅行が少なくなり、個人のプライベートな旅行が当たり前となった。団体旅行で賑わっていた温泉は、観光客の減少に悩んでいたが、最近、新たな発想で温泉地の活性化を進めている。今回は、日本一の湯量を誇る別府を訪ねた。



地獄めぐりの看板
撮影：2012 年 10 月 6 日



1879 年に開設した竹瓦温泉、
現在の建物は 1937 年(昭和
12 年)に作られたもの。
撮影：2012 年 10 月 5 日



血の池地獄
撮影：2012 年 10 月 6 日

★ 山は富士、海は瀬戸内、湯は別府

別府温泉は、「血の池地獄」「かまど地獄」など物騒な名前の地獄めぐりで知られているが、別府、鉄輪（かんなわ）、観海寺（かんかいじ）、明礬（みょうばん）、亀川（かめがわ）、柴石（しばせき）、堀田（ほりた）、浜脇（はまわき）の 8 か所の温泉郷があり、総称して「別府八湯（べっぷはっとう）」と呼ぶ。

別府温泉の歴史は古く、約 3 万年前の火山活動で噴出したマグマによって、別府湾一帯にたくさんの温泉が生まれた。8 世紀に編纂された「伊予国風土記」では、大国主命（おおくにぬしのみこと）が鶴見山麓（別府）から道後（愛媛県松山）まで海底に管を通して温泉を送り、少彦名命（すくなひこなのみこと）の病を治したという神話が残されている。

鎌倉時代には、大友頼泰が元寇の役で負傷した兵を癒すため別府、鉄輪などに療養施設を作ったとの記述もあるので、1200 年頃には、湯治場として利用されていたと思われる。江戸時代後期には温泉宿も数多くでき、多くの入湯客が訪れる場所になっていた。

明治時代に入ると 1871 年(明治 4 年)に別府港が完成し、73 年には大阪との航路が結ばれ、別府は温泉観光都市として発達を始める。明治初期は、県が主導し、改築費などを出し、1872 年(明治 5 年)には清華泉(西の湯)、79 年には竹瓦温泉が新築されている。その後も、町が主導して温泉行政に取り組んでいった。現在でも市営の温泉は 10 数か所あり、地元の人で賑わっている。

上総堀り（かずさぼり）という新しい掘削技術により、明治後期には 1,000 の掘削井があったといわれている。1904 年(明治 39 年)別府町と別府温泉の発祥の地といわれる浜脇町が合併し人口約 6,800 人の別府町が誕生、1911 年には別府駅も開設、福岡、小倉方面から訪れる客が増えてくる。一方、温泉治療や火山・地震関係の研

仲原正治

の

まちある記



別府駅前の油屋熊八像—両手を天高く伸ばし、子供をぶら下げているユーモラスな像だ。
撮影：2012年10月5日



観光客でにぎわう湯布院で、静寂を保つ「亀の井別荘」
撮影：2012年10月6日



全国共通の温泉マーク：モデルは「混浴温泉世界」総合プロデューサー山出淳也氏
撮影：2012年10月5日

究で、陸海軍の病院や九州大学の附属病院、京都大学の地球物理学研究所なども進出し、湯治場としての地位を固めた。

別府温泉を一躍有名にしたのは、別府温泉の父と言われる「油屋熊八」だ。彼はアメリカから帰国後に妻を頼り別府に来て、1911年に亀の井旅館（現：亀の井ホテル）を創業、1928年には亀の井自動車を設立し、日本最初の女性バスガイドを導入、地獄めぐりを行う定期観光バスを始めている。彼が1921年（大正10年）に湯布院に建てた「亀の井別荘」は今でも奥座敷としての静かな佇まいを見せている。

現在も使われている「温泉マーク」の元祖はドイツだという説と「温泉記号発祥の地」の記念碑が建てられている群馬県磯部温泉だという説がある。しかし、この温泉マークを普及させたのは「油屋熊八」であることは間違いない。宣伝のためハッピーや名刺に刷り込み、「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」というコピーを考案し、このコピーを刻んだ標識を富士山山頂や東京、大阪に設置し、観光客の誘致に奔走した。

★別府法と国際観光文化都市

1937年（昭和12年）3月25日から5月13日までの50日間、別府公園一帯125,000㎡の敷地で「別府温泉観光大博覧会」が開かれた。こうした取り組みで別府の観光地化は進んだが、すぐに第2次世界大戦がはじまり、別府には一般の療養客が来るだけとなっていく。

戦後になると温泉観光地の復活のために、1950年（昭和25年）に別府国際観光温泉文化都市建設法（「別府法」と呼ばれる）が成立する。別府法の第一条（目的）では「この法律は、国際文化の向上を図り、世界恒久平和の理想を達成するとともに観光資源の開発によって経済復興に寄与するため、別府市を国際観光温泉文化都市として建設することを目的とする」と謳っている。そして、国や地方自治体の援助、特別の助成なども規定され、57年には「別府温泉観光産業大博覧会」が開かれ、別府の町がよみがえってくる。当時は別府市のほか、温泉では静岡県伊東市、熱海市、愛媛県松山市が、文化関係では京都市、奈良市、島根県松江市などが特別都市建設法により住民投票を経て国際観光文化都市に指定されている。

1965年頃からの約10年間は新婚旅行ブームで、皇室が訪れた宮崎県の青島が新婚旅行のメッカとして注目され、別府温泉にも多くの若いカップルが訪れるようになる。また、高度成長期に入ると団体旅行が盛んになり、団体客目当てのストリップ劇場や遊技場、バー・スナックなどが次々にできた。1976年には宿泊客600万人を超えており、この頃が別府温泉の黄金期と考えられる。

その後、宿泊客の長期低落傾向が続き、バブル経済期に一時的には宿泊客が回復したが、1990年代に入ると日本経済は本格的に低迷期に入り、企業の倒産が続き、温



大型ホテルやマンションが
立ち並ぶ別府市内
撮影：2012年10月6日



市営の堀田温泉 入浴料 210
円
撮影：2012年10月6日

泉もホテルや旅館が倒産し閉鎖するということが続いた。この時期を境に、団体旅行は減少し、気の合った仲間や家族での旅行が主流になり、団体旅行は少なくなっていく。別府温泉は約60%が団体客、男性客が女性客の1.5倍に上っていることもあり、若年層や個人客、女性客の取り込みについての魅力づくりが遅れていた。

★オンパクって何

観光客の減少傾向が続く中、別府でも観光客誘致のキャンペーンやイベントなどを行ってきたが、減少傾向は歯止めがかからない状況となっていた。一方、九州はアジアに近いという利点を活かし、福岡や長崎などがアジアからの観光客の受け入れを大々的に始める。世界中に、日本のようなサービスが良く、解放された温泉がほとんどないことから、別府でもアジア諸国の団体客が多くなってきた。しかし、中国人団体観光客の客単価が安すぎるため、採算が取れずに受け入れない旅館や、日本人の温泉感覚とアジア人の感覚の違いが大きく、アジアの団体客を受け入れるホテルや旅館には日本人客が減少するという事例もでてきた。別府温泉の2010年の外国人観光客は約27万人で、約80%が韓国、そのほか中国、台湾が中心だが、昨今の領土問題による国際情勢の変化でアジアからの観光客の大幅な減少が予想される。

こうした中で、一時的な集客やイベントに頼ったことを進めても町は活性化しないことに気付き、地域固有の文化や資源、風土を活かしたまちづくりを進めていくということを考えて始めたのが、2001年の別府八湯温泉泊覧会（オンパク）だ。

オンパクは地域の抱える課題を解決するには地域の資源、人材を有効に活用することが重要だという観点から、自分の暮らす場所の魅力をまず知ること、それを知るために地域の資源を発掘することから始めている。モノだけではなくヒトも含まれており、オンパクという「場」で、地域の事業者が地域資源を活かした多彩なサービスを提供し、多くの住民が参加して楽しむことで「地域の再発見とコミュニティの再生」を図るものだ。プログラムの種類も「まちあるき」「自然体験」「文化」「健康」「地域体験」「温泉」など多種多彩になっていて、これを支えるのが地域の商業関係者や学生、まちづくり団体など多様な主体によって構成される「パートナー」と呼ばれる人たちだ。参加者は地元住民が多く、観光振興の取り組みと同時に、起業支援（インキュベーション）のための取り組みになっている。

別府では2001年以来、約20回のオンパクが開催されているが、1か月弱のイベント期間に100を超えるプログラム、3000人以上の参加者、200以上の事業者が参加している。

オンパクはNPO法人ハットウオンパク（鶴田浩一郎代表理事）が主体となっているが、このノウハウを全国に伝える動きをしており、2007年からはオンパクの事業



地元の客が中心の市営「柴石温泉」、とても静かで、良い温泉だ。入浴料 210 円
撮影：2012 年 10 月 6 日



国道 500 号線から少し入った場所にある「明礬温泉」
撮影：2012 年 10 月 5 日



別府市内には温泉の蒸気がいたるところで噴出している「鉄輪温泉」
撮影：2012 年 10 月 5 日

モデルを他地域で活用する「ジャパン・オンパク」事業が国の支援のもとに始まっている。現在、北は函館市、南は沖縄市まで 20 か所以上でオンパクの考え方をともに、事業を進めている。

オンパクは地域の個性や魅力づくりを行うことで多くの観光客を誘致する効果に繋がっており、人材育成や雇用の確保、若者の定着などを総合的に進める「まちづくり」となっている。

別府市 ONSEN ツーリズム部観光まちづくり課の 2010 年度(平成 22 年度)観光動態要覧によると、観光客数は約 793 万人、宿泊客数は約 230 万人。この数年、観光客の減少は食い止められている。

★「混浴温泉世界」はまちを変えていく

2005 年、別府の街に新しい動きが始まった。オンパクは地域の人々が中心となって町の魅力を発掘することから始まっているが、地域外から別府の魅力を発見し発信するグループが立ち上がった。リーダーは山出淳也氏、大分県出身だが別府とはほとんど関係のなかった彼が、アートと街を結びつけることを始める。2005 年に発足した BEPPU PROJECT は「国際芸術フェスティバル」の開催を маниフェストに、現代芸術の紹介、教育普及活動、人材育成講座、出版事業を行いながら、市街地の空き家をリノベーションして活用する「platform」事業を展開している。一見すると「混浴温泉世界」という華やかなアートイベントを行っているアート NPO なのかとも思うが、実際には地道にまちに入り、地域の資源を発掘して新しい用途を与える事業を進めている。

別府の温泉旅館は、少しずつ盛り返しているが、景気の後退により別府駅周辺を中心市街地には空き家・空き室が目立ってくるようになる。こうした空き家を活用するプロジェクトを進め、旧ストリップ劇場「A 級別府劇場」を改装して「永久別府劇場」というパフォーマンスやダンスが行える場に変えたり、アパートをアーティストのレジデンス施設や発表の場として活用したりしている。5 年前から、別府市中心市街地活性化協議会が始めた「platform」事業は、空き店舗を改修して、若者の起業の場所、地域のコミュニティの場として活用するプログラムで、すでに 8 か所のプラットフォームができています。別府市が改修のための助成金(1 か所 300 万円程度)を出し、活用する団体や企業が運営費を負担する方式で進めている。

現代アートの展覧会だけではなく、毎年市民文化祭「ベップ・アート・マンス」を開催し、町じゅうで様々なアートが楽しめる工夫をしている。プロのアーティストだけではなく、文化的なことであれば、何でも受け入れる姿勢で事業を進めている。今年は「混浴温泉世界」と同時開催で、123 の団体が 149 の企画で進めている。

「混浴温泉世界」が 3 年に一度の別府市全体を舞台とする国際芸術祭で、県外から

仲原正治

の

まちある記



「platform」事業でコンバージョンされた店舗、現在は竹細工の店となっている。
撮影：2012年10月5日



市街地にあるベップ・アート・マンスの会場
撮影：2012年10月6日



ベップ・アート・マンスの案内書。97Pあり、149の企画や飲食店地図が掲載されている

左：旧ストリップ劇場「A級別府劇場」を改装した「永久別府劇場」（「みかんぐみ」曾我部昌史氏と地域のNPOがリニューアル）
撮影：2012年10月5日

右：「永久別府劇場」では週末、ダンスパフォーマンスが行われている。
撮影：2012年10月5日

の数十万単位の集客交流を目指すのに比べ、「ベップ・アート・マンス」は小規模の文化団体の活動を支援することにより、地域文化の底上げとコミュニティの育成を狙っている。そのため、混浴温泉世界 2009 では大分県外の来場者が約 60%だが、「ベップ・アート・マンス」は大分県内から 85%以上の集客になっている。

「混浴温泉世界」のもうひとつの大きな特徴は、行政からの補助金に頼らないという構図となっていることだ。例えば、横浜トリエンナーレでは、大半が行政負担と入場料収入が原資となっている。横浜시는日本で人口最多の市で、平成 24 年度の一般会計予算が 1 兆 4000 億円（総予算額約 3 兆 3000 億円）という自治体なので、4 億円強のトリエンナーレ予算を立てることができる。一方、別府市の一般会計予算は約 430 億円、特別会計を合わせても約 860 億円規模の自治体なので、別府市の「混浴温泉世界」への負担金は 500 万円にとどまっている。イベント総予算の 5%程度が行政からの支援で、他には、地元の大分銀行をはじめ資生堂などのグローバルな企業の支援や、今年度文化庁が新しく助成制度を立ち上げた「地域発・文化芸術創造発信イニシャティブ」の支援などを基本に事業を進め、行政の力を借りなくてもできるような体制作りを進めている。横浜トリエンナーレのような行政主体のイベントは、市が抜けたら実施ができないが、別府では、自力で頑張っているのも、何らかの形で存続できるようになっている。

今回の「混浴温泉世界 2012」は 10 月 6 日から 12 月 2 日まで開催されているが、8 つのプロジェクトを中心に、作品が展示されている。「混浴温泉世界」というネーミングは「人種や性別、宗教などにとらわれずに、混浴のように誰でもが同じような立場で参加できることを意図している」と聞いた。



仲原正治

の

まちある記

左：別府タワーの広告ネオンサインの点灯順を変えることで様々な言語の単語が現れる作品（作家：小沢剛）
撮影：2012年10月6日

右：「トキハ別府店」の1フロアで霧と光を用いて幻想的な世界を作り出す（作家：アン・ヴェロニカ・ヤセンズ）
撮影：2012年10月5日



別府駅前に掲示されている「混浴温泉世界2012」看板。
撮影：2012年10月5日



栈橋に100本ののぼりとその裾に取り付けられた音色の異なる鈴が風向きや風の強さで音を奏でる。（作家：クリスチャン・マークレー）
撮影：2012年10月5日



右：鉄輪温泉地区に新たな風景を竹細工で表現する（作家：テウ・ジージェ）
撮影：2012年10月5日



★アジアとの結びつきを促進する立命館アジア太平洋大学

日本の社会は、東京一極集中が加速し、情報も人材も東京圏・大阪圏に集中してしまい、地方都市からは人材が流出していくばかりの現状である。原因は就職する場所が大都市に集中していること、地方の大学の機能が、東京など大都市圏への就職者の育成となっていることがあげられる。地域の特性を活かしたプログラムや地域の魅力を発掘するプログラムを大学が開発し、地域の産業や農業などうまくコラボレーションすることを進め、地域を活性化していくことが必要だ。山形大学農学部では、庄内地方の在来種の野菜の研究を通して、鶴岡市の「食の創造文化都市」を支援するなど、大学が地域と風土を踏まえて活動し、若者と協力しあいながら町を活性化していく。そうした大学の姿が求められている。

別府には二つの大学がある。ひとつは1950年に開設した別府大学だ。文学・国際経営系と食品・栄養系の学部が主な学科だが、JR九州に「別府大学前」という駅も開設されていて、約2,500人の学生を要している。2000年には「立命館アジア太平洋大学（APU）」がオープンし、約5,000人の学生が通っている。APUは、「自由と平和とヒューマンイズム」「国際相互理解」「アジア太平洋の未来創造」を理念に掲げ、国際社会に対応できるグローバルなリーダー、国際社会に貢献する人材の育成を目指している。大学には約1300室の学生寮（APハウス）があり、外国人新入生はAPハウスに入り、日本の生活や風習などを学びながら、日本に慣れることから始めている。学生は約半数が外国人で85か国の地域から集まっている。

APUは大分県の大学誘致策の一環として設置された。設立に当たり、総事業費約297億円の半分150億円の補助を大分県から、42億円の補助金と土地（約42ha）を別府市から無償提供を受けている。大学誘致の効果で一番大きいのは、学生と大学関係者約6,500人（別府の人口の5.4%）の居住による経済効果だ。ほとんどの学生が

仲原正治

の

まちある記



立命館アジア太平洋大学の正門（山の上にあるため、冬季に雪が降った場合は休校になることもあると聞いた）
（写真：仲原正治 撮影：2012年10月6日）



路地まで石畳に整備されている鉄輪温泉地域
撮影：2012年10月5日



鉄輪温泉「熱の湯」。45℃位あり熱い。10年前に入った時はぬるめようとして地元の人に注意された。入浴料は無料。
撮影：2012年10月5日

寮やアパート住まいで、少なくとも 5000 室のアパートが借りられている計算になる。別府市の人口が約 12 万 5 千人を保っているのは大学に負うところが大きい。APUの大部分内の経済波及効果は毎年 210 億円程度と推計されている。直接的な経済効果以外にも、大分県内の 20 以上の市町村との友好交流協定を結び、学生と地域との交流事業や留学生を講師として小中学校などに派遣した語学教育や異文化交流など、地域に根差した活動の効果は計り知れない。若い人が地域で活動する都市は活性化する例が多く、「混浴温泉世界」でも、作品制作や通訳など数多くの学生ボランティアが参加している。

★温泉と夜の別府を歩く

まずは駆け足で別府八湯を廻った。それぞれに特徴があるが、鉄輪温泉は、10 年前に来た時に比べて整備されていて、道路や公衆浴場も新しいものになっている。ただ、熱源は 95℃もあるので、それを冷ますのが大変らしく、45℃近い湯に平気で入っている人もいる。ぬるくしようと水を入れようとして怒られることがある。浜脇温泉は、別府温泉の発祥の地であり、昔は遊郭があり栄えていた。昭和 50 年代までは浜脇温泉と浜脇高等温泉のふたつが、近代建築としての存在感を見せていたが、再開発により取り壊され、平成 3 年に同じ場所に浜脇温泉、湯都ピア浜脇の二つに変わったが昔の建物を懐かしむ住民も多い。

地獄めぐりは、観光客の楽しみで、1 か所 400 円の入場料が基本で、8 か所全部回る場合は 2,000 円になる。若干高いと感じたが「地獄の沙汰も金次第」ということわざもあるので仕方ないだろう。今回、二日間別府に滞在し合計 9 回温泉に浸かったが、一日に 3 回程度にしておいた方がよい。5 回目になると温泉に入って 30 分後には体がポカポカして、血圧が上がったような感覚になり、湯あたり状況になってしまった。何事もホドホドが良い。

土曜日の夜、多くの居酒屋が賑わっていた中で、橘銀天街は 50%以上の店がシャッターを閉ざしている。長引く不況で観光客が減ったこと、近くにあった市役所の移転も原因と考えられる。この橘銀天街には現在、アーティストにより「商店街全体を劇場に変えるプロジェクト」が進行している。竹瓦温泉近くには数多くの飲食店や風俗店が並んでいて、無料案内所も数か所あり、多くの客引きが路上にでている。また、露地に入ると小さな温泉があるなど、温泉と風俗が共存しているという普通の町とは少し違った風情がある。

大分県は各市町村が地域の特徴ある産物を育て、地域を活性化させていくという「一村一品運動」を 30 年以上前から進めているが、この運動の考え方は現在のオンパクや BEPPU PROJECT に繋がっている。地域を活性化させる主体は「地元」であり、「地元の産物」であるということだ。今回、別府を訪ねて感じたことは、明

仲原正治

の

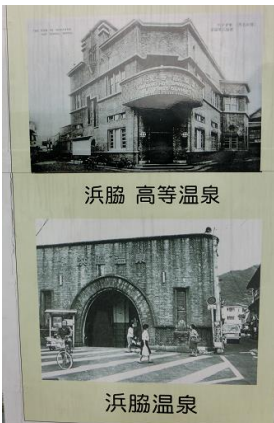
まちある記



鉄輪むし湯(一遍上人が1200年代に創設したといわれている。現在の建物は2006年にリニューアルしたもの。入浴料500円。
撮影：2012年10月6日



再開発によってできた湯都ピア浜脇(写真：仲原正治
撮影：2012年10月5日



当時の浜脇温泉と浜脇高等温泉の写真が再開発地区に掲示されている。
撮影：2012年10月5日

治のころに、創造性あふれることを行ってきた油屋熊八が別府を一大温泉街に育てたが、「オンパク」リーダーの鶴田浩一郎氏と「混浴温泉世界」の山出淳也氏は現在の油屋熊八のような人物で、彼らが地域で活動することによって、地域はますます良くなっていく気がする。こうした人物が、実は日本中にいて、地域のために頑張っていることを忘れてはならない。今回の旅は駆け足だったが、温泉でゆっくりとリラックスして「浮世の憂さ」を流してしまうことが、現代人には必要なのではないだろうか。



左上：楠銀天街「商店街全体を劇場に変えるプロジェクト」により町の様子が変わっている。 撮影：2012年10月5日
右上：無料案内所周辺には客引きが何人かいた。 撮影：2012年10月6日

★自然と調和—国東半島

「混浴温泉世界」が協力して、大分県全体でアートプロジェクトを進めている。その一つが「国東半島アートプロジェクト2012」(11月3日～11月25日)だ。このプロジェクトに先駆けて、「国東半島いいところ巡りツアー」に参加したが、これが予想以上に面白かった。国東半島は日本の秘境100選に選ばれており、山岳密教信仰の地で、磨崖仏や無数の石仏が今でも残っている。こうした風景の中を、豊後高田市の観光ボランティアの豊富な知識で解説してもらい、熊野磨崖仏や棚田などの風景だけではなく、若い人が集落に入り、アートを通してコミュニティを形成し始めている姿を見ることができた。圧巻は、密教の文殊仙寺での護摩焚きで、現代アートのパフォーマンスとは違い、1000年以上の歴史の中で培ったパフォーマンスは、参加した人を感動させる。日本という国の文化の広さを感じさせるツアーだった。国東半島はあまり俗化せずに、今のままを残し、地域に若い人が入ってきて、活性化するような道を歩んでほしい。世界遺産になって、観光客目当ての店が立ち並ぶようなことは勘弁してもらいたい。

仲原正治

の

まちある記

左：作られた年代は定かではないが、鎌倉時代にはすでにあったと考えられている熊野磨崖仏(重要文化財)
撮影：2012年10月7日

右：大分県国見町にある湊音寮(じゅいんりょう)ー明治初期に建てられた木造3階建てでギャラリーとして活用されている。
撮影：2012年10月7日



天台宗峨眉山文殊仙寺は崖に張り付くように建っている。
撮影：2012年10月7日



秋吉副住職による護摩焚きは厳かで、インパクトがあった。
撮影：2012年10月7日

★3年後の「混浴温泉世界」

「混浴温泉世界」も3回目の2015年9月のイベントで最終回になるということで、再び、大分の地に戻ってきた。

このイベントの主体となっているのが「NPO 法人 BEPPU PROJECT」だ。BEPPU PROJECTは、2005年に事業を通じアートの持つ可能性を社会的に位置づけ、市民に対する現代美術を中心とした文化、芸術の振興に関する事業を行ない、当該分野の発展に寄与することを目的として設立されている。

2009年に1回目の別府現代芸術フェスティバル 2009「混浴温泉世界」を実施、当初から3回の実施を行うことで、その後は、それまでの実績などを考慮して、次のステップに向かうこととしている。

今回、一番面白かったのは、「アートクルーズゲート」。路地をまち歩きをしながら、様々な空き店舗を活用して展示している作品群ツアーだった。ツアーは、1回15名程度しか参加できないため、予約が必要だが、毎回、ほとんど満員で参加できなかった人も多かったようだ。まち歩きのリーダーは目が不自由な障害者だったが、様々なまちの歴史や由来なども聞くことができ、そのうえ、アート作品もその場所にふさわしいものだったので、とても楽しめた。

また、「永久別府劇場・恐怖の館」や「ベップ・秘密のナイトダンスツアー」など、人数限定の企画があり、なかなか参加できる人数が限られてしまったことは少し残念だった気がする。私が訪れた時は最終日に近く、永久別府劇場は3時間待ちとなっていて、結局、見ることはできなかった。

トキハデパートを活用した「わくわく混浴デパートメント」は多彩なアーティストの参加で盛り上がり、会期中、約46,000人が参加している。過去の2回は、92,000人、117,000人だったが、今回は、予約制・定員制だったため、全体では約54,000人となっている。

「混浴温泉世界」と同時に開催された「ベップ・アート・マンス」は別府で行われ

仲原正治

の

まちある記



「トキワ」で開催された「わくわく混浴デパート」
撮影：2015年9月26日



「アートクルーズゲート」は
路地探索をしながらアート
作品をみるツアーだ。
撮影：2015年9月26日



「永久別府劇場・恐怖の館」
は、待ち時間95分だった。
撮影：2015年9月26日

左：「アートクルーズゲート」
で説明する街歩きのリーダー
撮影：2015年9月26日

右：「混浴温泉世界」のフィ
ナーレは「トキワ」の屋上で
の市民との協働のダンスや
パフォーマンスだった。
撮影：2015年9月27日

る様々な文化事業を紹介して支援する登録型のプラットフォーム事業で、71 団体・個人が 88 のプログラムを開催している。ここにはプロだけではなくアマチュアも参加しているが、こちらでも約 54,000 人の参加者があった。

過去3回の「混浴温泉世界」を進める中で、これからどうするのか、期待されている。一つの悩みは、事業費をいかに捻出していくかという課題だろう。1 回目から行政からの支援や負担はあまり多くないと聞いている。せいぜい5%程度だ。横浜トリエンナーレのように、ほぼ行政が全額を負担するのとは違い、様々な企業や団体からの支援なくしては成り立たない構図となっている。

現在、日本各地で行われている「芸術祭」のほとんどが、行政主体で、税金を使っ
ての地域振興が主流だ。札幌、新潟、愛知、神戸、今年行われるさいたま市などを
含め、関係する自治体が資金の大半を負担している構図だ。

一方、行政にあまり頼らない「芸術祭」としては、越後妻有、瀬戸内などがあるが、
これらには「ベネッセ」という大規模なスポンサーがバックについて、オーナー
の福武氏自身が総合プロデューサーについている。そのため、資金的な脆弱性は
ない。しかし、「別府混浴温泉」の総合プロデューサーは、資金力をあまり持たな
い元アーティストなので、毎回のように事業費の捻出には苦労を重ねているに違
い。こうした土俵の上で戦ってきたプロデューサーの山出淳也氏には本当に頭が
さがる。3年に1回のイベントだけではなく、「プラットフォーム事業」などで、町
全体の活性化に取り組んでいる姿は、これから、過疎化が進む地方都市にとっては
モデル的なケースとなろう。

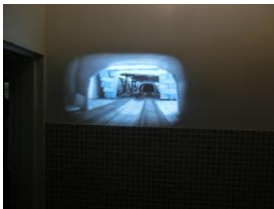
こうした環境の下で、今後、別府がどのようなまちになり、NPO 法人 BEPPU PROJECT
がどのように町で「コト」を展開していくのか大きな期待を持って見守っていき
たい。



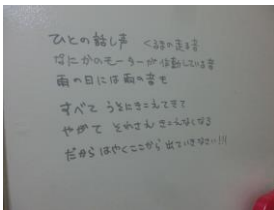
仲原正治

の

まちある記



上：アーティスト「目」の「見立線」という作品は、トイレの中を走る鉄道模型が寝具、店の方まで続いていた。
下：鉄道模型につけられたカメラの映像
撮影：2015 年 9 月 27 日



トイレにメッセージは岡田利規の作品。
撮影：2015 年 9 月 27 日

左：公衆トイレを作品にした「メルティング・ドリーム」は西山美なコ・笠原美希・春名祐麻の作品
撮影：2015 年 9 月 27 日

右：男子トイレも壁一面に絵が描かれていた。
撮影：2015 年 9 月 27 日

★「おおいたトイレナーレ」は終わっていたが・・・

別府での宿泊が難しかったので、大分市に宿泊したが、1 週間前まで大分では「おおいたトイレナーレ」（会期：2015 年 7 月 18 日～9 月 23 日）というイベントが行われていた。3 年前に訪ねた時に、担当者と知り合いになっていたので、1 週間遅れのイベントを案内していただいた。

「トイレナーレ」とは、3 年に一度開催されるアートフェスティバルを指すイタリア語「トリエンナーレ」とまちなかの空間に欠かせない「トイレ」を組み合わせた造語だ。大分市は商標登録もしている。（商標登録第 5622407 号）「トイレナーレ」開催により、キレイなだけでなく、「美しい」トイレ、「面白い」トイレをまちなかにたくさん作ることで、同時期に新規オープンする JR 大分駅ビル、大分県立美術館と連動し、大分の街を訪れるお客様に、驚きと、喜びと、感動を提供すると大分市のホームページに記載されている。

この事業は、大分市が職員のアントレプレナー（起業家）募集を行い、「大分ブランドプロモーション戦略事業」と「アートを活かしたまちづくり」を選んで進め、アートでの町おこしとトイレを融合させたユニークなイベントだ。

2012 年に「アートを活かしたまちづくり」の担当者と話した時に、2015 年春に県立美術館ができるので、その時まで、市街地で様々なアートの展開を進めたいとのことだった。

ネーミングも面白く、総合ディレクターは山出淳也氏がなったこともあり、「混浴温泉世界」と連動したユニークな芸術祭となっている。

会期終了後まだ 1 週間だったので、いくつかの作品は撤去されずに残っているが、トイレと言う特別な場所なので、においの問題などもあり、特に公衆トイレについては、毎日、清掃を行う必要もあり、管理が大変だったのではないかと感じた。



トイレナーレの総来場者数は延べ 18 万人となり、目標値である 15 万人を上回った。新聞やテレビなどのメディアへの掲載も多数あり、「日本トイレ大賞 地方創生担当大臣賞」を受賞するなど、九州だけではなく、関西や関東からの観光客も呼

仲原正治

の

まちある記

び寄せている。そのため、「おおいたトイレンナーレ 2015」開催に伴う経済波及効果を算出した結果、約 4 億円 となっている。事業評価の結論としては、トイレンナーレは、交流人口の増加、地域を誇る気持ちの醸成、賑わいの創出という目指すべき効果において、会期中に達成すべき目標値を達成した。但し、こうした効果を今後につなげていくうえでは、トイレンナーレを一過性のものとししない継続的な取組が必要であると報告書では述べている。

こうした取り組みが地方都市で継続的に行われていくことで、中心市街地の活性化を促す効果は考えられるが、地元に着目して、地元の若者を発掘していくことが、今後の大きな課題と考えられる。

3) 松山市 いで湯と城と文学のまち

「いで湯と城と文学のまち」が松山の特徴を端的に表しているキャッチフレーズ。松山城が中心に聳え立ち、周辺に坂の上の雲ミュージアムや美術館、少し歩くと3000年の歴史を誇る道後温泉、近くには子規記念博物館もある。湊石の「坊っちゃん」も有名。俳句甲子園も毎年行われ、町の要所には俳句ポストが設置され、誰でもが投稿できる。今回、松山で「道後オンセナート」が開催されていると聞いて、さっそく探索に出かけた。

★道後温泉からはじまる

松山市の歴史をたどると、まずは道後温泉に行きあたる。日本三古湯（有馬温泉、白浜温泉）の一つとして「日本書紀」や「源氏物語」などの文献にも登場し、3千年の歴史を誇ると言われている。

現在の道後温泉本館は1894年（明治27年）に完成し、当時で13万5千円の総工費をかけている。木造3階建ての本館は、その後いくつかの増改築を重ね、誰でも入れる共同浴場として多くの人々に愛され、1994年には国の重要文化財に指定されている。

松山城は、江戸時代前後に加藤嘉明が築城している。城の完成後すぐに加藤嘉明は会津に移り、その後蒲生忠知が入国したが、在城7年で死没、1635年松平定行が松山城主となり、江戸末期まで世襲が続いた。城は1784年の落雷で焼失、1854年に復興し、昭和初期に一部が焼失したが1966年から総木造による復元が進められ、現在に至っている。



俳句の町、松山にはいたるところに俳句ポストがあり、誰でも投稿できる。
撮影：2014年12月20日

左：道後温泉本館の入湯者は年間100万人を超える
撮影：2014年12月20日

右：松山城は江戸時代から続く日本の名城だ
撮影：2014年12月21日



1876年（明治6年）愛媛県庁が設置され県都となり、89年（明治22年）市町村制実施に伴い松山市が誕生、その後は政治経済の中心地として成長していった。

1945年5月4日、B29機8機により、松山海軍飛行基地が爆撃され、同年7月

仲原正治

の

まちある記



戦後間もない松山海軍飛行
基地（現松山空港）
（昭和20年頃 米軍撮影）

26日には松山市の中心部に焼夷弾が投下され、被災面積約4.8km²、被災戸数1万4300戸、死者251人行方不明8人、6万2000人余が被災し、旧市街の一部を残し、町は灰燼に帰している。海軍飛行基地は松山空港の前身で、終戦間際、源田実大佐を指令とする第343航空隊（紫電改）の活躍でも知られている。

戦後は、市民が協力し焼け跡の清掃整地作業を進めるなどを行い、1946年に復興土地整理事業を事業計画決定し、64年に換地処分公告、71年に完了している。51年には別府や熱海と同様に松山国際観光温泉文化都市建設法が施行され、観光都市づくりを推進してきた。

★中心市街地の現状と活性化基本計画

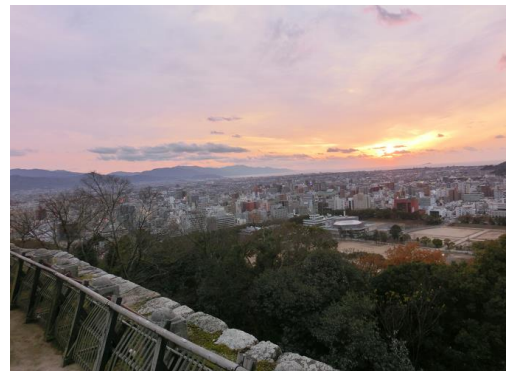
松山の中心市街地は、伊予鉄道の松山市駅から銀天街—大街道付近だ。伊予鉄道は1888年（明治21年）に松山—三津間に四国初の軽便鉄道として誕生している。中心港である三津浜港から材木を神戸方面に送るための鉄道だった。当時の駅名は「松山駅」だったが、1927年（昭和2年）高松方面から延伸した予讃線の駅の設置に際し、鉄道省の圧力で駅名を「松山市駅」に改称させられた。JR松山駅は市街地からは離れていたため、長距離客のみが利用する駅というイメージが強く、今もそれを引きずっている。

松山市駅は、1971年（昭和46年）に百貨店「いよてつそごう」と一体のターミナル駅となった。その後、増床し、高島屋との資本提携により、2001年からは「いよてつ高島屋」として営業を行っている。

「いよてつ高島屋」の前面には、松山市唯一の地下街「まつちかタウン」があり、その隣りに銀天街があり大街道アーケードへと続いている。大街道の入口には三越松山店があり、高島屋と三越を結ぶ通称L字地区約1kmが松山市の中心市街地となっている。

左：左上：松山市の中心部の
地図
撮影：2014年12月20日

右：松山城からコンパクトな
松山市街と瀬戸内海を望む。
撮影：2014年12月21日





朝のJR松山駅は通勤客で賑わっていた。
撮影：2014年12月22日



百貨店と一体となった「松山市駅」
撮影：2014年12月21日

右：市内電車路線図―道後温泉から松山駅に向かう電車は平日昼間約5分間隔で運行されている。
撮影：2014年12月20日



道後温泉駅から出発する坊っちゃん列車と市内電車
撮影：2014年12月20日



県庁付近を走る市内電車
撮影：2014年12月20日

松山市は人口約52万人の四国一の都市だが、20年後には45万程度に減少する予想だ。現在面積は429km²で、約70km²（約16%）の市街地に約80%の人が住んでいる。地形のせいもあるが、もともとコンパクトな街で松山城から5km以内にほとんどの公共施設などが集中している。JR松山駅、松山市駅、道後温泉、大街道や銀天街などの中心市街地、港や空港も圏内にある。起伏も少ないので、自転車も便利だし、地域間を繋ぐ市内電車もある。近くに大都市がなく、近隣の中小都市は商店街が疲弊しているため、県民は松山に買い物に来ることが多く、ライバルが少ないのが現状だ。隣接の松前町には「エミフルMASAKI」という敷地面積約20万m²、延床面積約14万m²の四国最大級のショッピングセンターが2008年にオープンしているが、中心市街地の商店街にはあまり大きな影響はないと聞いた。しかし、全体的には中心市街地を取り巻く環境は年々厳しさを増していて、2008年には市街地約450haを対象に、「城下町ならではの賑わいのあるまち」「坂の上の雲のまちづくり」とまちなか回遊を活かした観光交流のまち」「便利で、楽しい商業のまち」を基本方針に、賑わい創出、観光人口増、商業活性化を目標とした松山市中心市街地活性化基本計画を立てている。

活性化の拠点として、三越松山店の近く、大街道入り口にある旧ラフォーレ原宿・松山跡地に2015年夏には複合施設（ホテル・商業・ブライダル）がオープンする。



★まちづくりとアーバンデザインセンター

松山市は2000年に中核市になり、2005年に北条市、中島町と合併し、四国初の50万都市になった。近年はコンパクトシティを目指し、2013年3月15日には「環境モデル都市」に選定されている。

松山市は瀬戸内海に面し、温暖少雨な気候で日照時間も長いため、太陽エネルギーを中心とした自然エネルギーの導入を早くから実践している。2000年からクリーンエネルギーの導入を積極的に推進し、07年からは太陽エネルギーをより有効的に「脱温暖化」「産業創出」に活かす「松山サンシャインプロジェクト」を展開、11年度には1,435件の太陽光発電の導入支援を進め、小中学校の導入率は45%に達している。



松山市駅前の「まつちかタウン」
撮影：2014年12月21日



松山銀天街入り口。アーケードの発祥の地、小倉銀天街から名前はきている。
撮影：2014年12月21日



日曜日の午後の大街道
撮影：2014年12月21日

右：3核とそれをつなぐ銀天街、大街道のモール商店街（通称L字地区）地図
撮影：2014年12月20日



2014年4月には、産学協働の「松山アーバンデザインセンター（UDCM）」がオープンした。アーバンデザインセンターと聞くと、2009年12月に亡くなった北沢猛東大教授を思い浮かべる。横浜市都市デザイン室長を歴任したのちに東京大学に移り、日本全国で「まちづくり」の実践を具体的に進めるアーバンデザインセンターの構築を進めた。福島県の田村市（UDCT）や千葉県柏市柏の葉（UDCK）などに拠点を持ち、全国のまちづくりの指導を行い、その地域の個性づくりや人材の発掘・育成に勢力を傾けた。直接的にはUDCMには関わっていないが、彼の思想は松山にも受け継がれているのではと訪ねた。

松山市は市長の方針である「市民目線と現地主義」を踏まえ、まちづくりには地元との協働が必要と考え、その調整役を担う組織を求めていた。地元愛媛大学と東京大学が共同して、その受け皿としてUDCMを設立した。地元との調整を進めるま

まちある記



UDCMで松山市のまちづくりの内容を聞く筆者たち
撮影：2014年12月21日



UDCMが運営するまちな
か広場には、子供たちが遊ん
でいた。
撮影：2014年12月21日

左：中心市街地の拠点を中心とした生活圏の再構築の概念図（松山市ホームページ）

右：新たなまちづくり体制の構築（松山市ホームページ）

右：ＪＲ松山駅周辺の開発イメージ。国の補助金を導入して進めているが、開発の必要性が乏しい気がする。

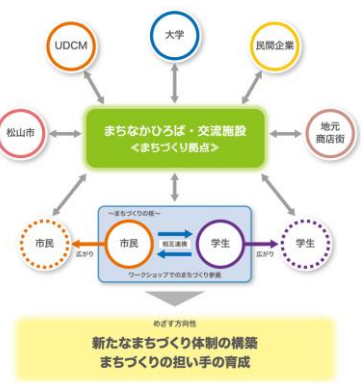
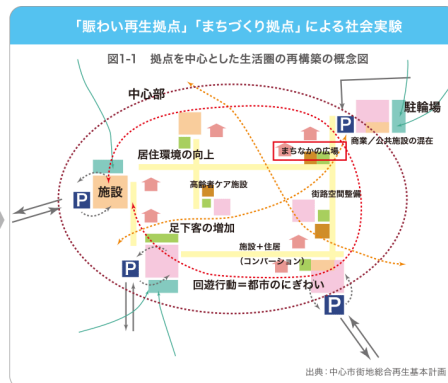
撮影：2014年12月22日

ちづくりの拠点、情報発信拠点としての役割を担うため２０１４年４月に組織を設立、１１月に銀天街地区に集会室、研究室、外に広場のある拠点をオープンさせた。活動は週２回ほどのスクールが中心だが、松山市の課題を市民との連携を通じて解決に導きたいと考えている。

具体的には、大街道入口にある旧ラフォーレ原宿・松山跡地にオープンする複合施設（ホテル・商業・ブライダル）（優良建築物等整備事業・森ビル）建設に伴うアーケードの景観づくりなどを進めている。松山市は再開発事業を行ったことがないので、ＪＲ松山駅の立体交差事業に伴う再開発等のコーディネータも担う予定で、まちの総合的な魅力づくり、質の高い公共空間づくりを中心に事業を進めたいと語っていた。

UDCMの拠点は、地元の都市再生協議会（構成員：㈱まちづくり松山と商工会議所と伊予鉄道）に市が補助金をだし、協議会がUDCMに寄付行為をする形態となっている。まちづくり松山（松山中央商店街約360店舗）には市が3%出資、駐車場共通チケット、フラッグ広告、プラズマビジョン広告などを担っている。

現在の大きな課題は、まちなかに若者を定着させることだが、市内での就職口は受け皿が少なく、大学生が関東や関西方面に就職してしまうため、なかなか難しい。また、四国特有の水不足が深刻なこともあり、2次産業の進出企業が少ないのも現状だ。





道後温泉本館の休憩所の大広間にも映像作品（作家：福田泰崇）が展示されている。
撮影：2014年12月20日



本館の個室には夏目漱石の胸像も飾られている。
撮影：2014年12月20日

左：ライトアップ（作家：高橋匡太）で表情が変わった道後温泉本館
撮影：2014年12月20日

右：中谷芙二子の霧のアート作品で幻想的な表情を見せる本館
撮影：2014年12月20日

★道後温泉本館改築と道後オンセナート

観光都市松山市の現在の大きな課題は、道後温泉本館の改築をスムーズに進め、年間500万人を超える観光客の減少をいかに食い止めるかということだ。本館は国の重要文化財のため、建物を解体して再度組み立てることになるが、どこまで部材を新しくするのかなど、国の許可を得ながら進める必要がある。2017年に開催される愛媛国体の時期から工事を開始する予定だ。改修には10年近くかかるため、本館営業を中止すべきか、一部を営業しながら改修するのか、課題は尽きない。道後温泉本館は、松山市所有で、湯元の権利も松山市が持っているため、松山市には道後温泉事務所という部署がある。温泉事務所が中心になって改築を進め、観光客対策も担っている。

日本最古の道後温泉で最先端のものを見せ、新しい魅力を提供し、観光客の減少を食い止める目的で行われたのが「道後オンセナート2014」だ。主催は松山市や温泉旅館協同組合などで構成される「道後温泉本館改築120周年記念事業実行委員会」。プロデュースは公募で、スパイラル／㈱ワコールアートセンターが選ばれた。瀬戸内芸術祭を意識しつつも、道後温泉の地域性を大切にするため、一過性のイベントではなく、人づくり・まちづくりのアートプロジェクトとして実行している。



2013年4月に実行委員会を立ち上げ、10月10日に「うぶゆシンポジウム」の開催。12月にプレオープン、2014年4月にはイベントをオープンさせている。内容は道後温泉本館を中心に、各所で映像の投影やホテルの客室をアート化する作品が中心だ。映像系は夜の鑑賞だが、昼はアーティストの作品が展示された客室を鑑賞料を払って見ることになる。客室は宿泊予約が入っているため、一般客が鑑賞できるのは午前11時から午後3時頃までの限られた時間で、1回に5名程度のため、全部を見て回るには1日では難しい。客室の作品製作費は各ホテルの持ち出しで、草間彌生のアートには1千万円を超える負担があったが、入場料やグッズ売り上げで製作費を回収したと聞いた。

本館では外観をライトアップし、新しい風景を作り、そこに霧が立ち込めるなど、

仲原正治

の

まちある記

左：道後オンセナートのナイトツアーでは、矢内原充志のデザインしたユニフォームを着たスタッフがアートと歴史を案内してくれた。
撮影：2014年12月20日

右：草間彌生のアートで埋め尽くされた宝荘ホテル客室
撮影：2014年12月20日



1000年後の道後温泉の姿を影絵で表現したスティーヴン・ムシンの作品は市内10数か所に展示されていた。
撮影：2014年12月20日



モデル、写真家のKIKIの作品があるホテルルナパーク客室
撮影：2014年12月20日

今までの道後温泉とは違った幻想的な光景を見ることができ感動的だった。国や市の補助金、温泉旅館協同組合、企業協賛などにより1億円以上の予算をかけているが、本館入場者や宿泊者数が1割程度伸びるなど「道後オンセナート」による経済効果も上がり、中高年層に加え、若い女性の旅行客を開拓したと聞いた。来年以降は、アートプロジェクトとして進め、3年に1回程度大きなイベントを行う予定だが、中間の2年間で街に人材が集積して、3年後にまた楽しい催しが開催されることを期待している。



★三津浜と若者たち

松山市の西部に三津浜港がある。江戸時代の商業の中心地で松山藩の御用船が係留され、城下町松山の外港として、藩の物資の積出港として発展した港だ。魚市場も江戸時代の始めには開設され、瀬戸内の豊かな漁場を背景に、魚の取引が盛んに行われていた。「三津の朝市」として松山市民に親しまれていたが、1981年に松山中央卸売市場水産市場ができたため朝市は役割を終え、今は不定期に開催されている。明治以降も、松山の玄関口として明治天皇の来訪や坊っちゃんの主人公もここから松山に赴任している。

伊予鉄道松山市駅から高浜線に乗り、三津駅（約15分）で下車して徒歩か、次の港山駅で下車し、そこから三津の渡しで三津浜港に行くことができる。三津の渡しは、1400年代中頃に始まり500年以上前から地元の足として親しまれてきた。現在は市営で無料、対岸まで約80mの距離を1分ほどで運行しているが時刻表はない。三津浜地区は、明治・大正・昭和前期まで多くの観光客が訪れ、地元の魚市場として賑わっており、当時は映画館やアーケードを備えた商店街があった。近隣の高浜港の北に松山観光港ができ、フェリーなどの主要港になったため、三津浜には漁業関係者は残っているが、商店はシャッターも多く、往年の賑わいは失われている。

カフェ「田中戸」のオーナー田中章友さんは地域のキーパソンで、既存の資源を活用して町の再生を進めている。彼は三津浜沖の怒和島（ぬわじま）が故郷で、4年前に唐津から帰ってきて三津浜にカフェをオープンさせている。夏はカキ氷が評



三津の渡しで港山地区から三津浜へ渡る。
撮影：2014年12月21日



昔はアーケードがあり、賑わっていた中心商店街も空き店舗が目立つ。
撮影：2014年12月21日

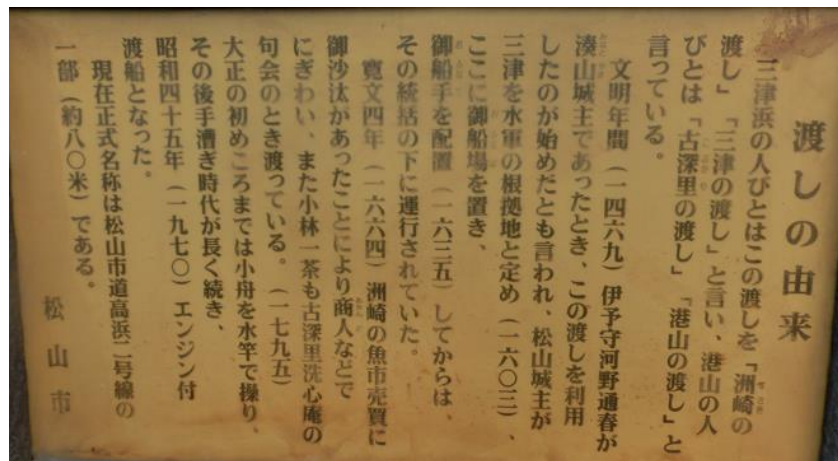


カフェ「田中戸」の店先には季節の果物が並んでいる。
撮影：2014年12月21日



「練や正雪」店内。日曜日の午前に訪れ、じゃこ天を食べ、土産を買おうと13時半に訪れたが、売り切れていた。
撮影：2014年12月21日

判で、夏に稼いで冬には海外で暮らすことを理想としていると話していたが、現実
は厳しいようだ。彼は地元の団体が集まった「にぎわい創出委員会」のリーダーの
一人として、行政や先輩たちの協力を得て数千人規模の観客が集まるようなイベン
トを年4-5本仕掛けている。世間では「よそ者、若者、ばか者」と言われるが、
その言葉が嫌いで、やはり「地元もん」が中心にならないと続かないと話していた。
よそ者も定着すれば「地元もん」になるので、ここに定着してくれる人を大事にし
ている。地元には竹輪とじゃこ天で有名な「練や正雪」という店があり、そのオー
ナーがよそ者と地元を繋ぐ調整役となっている。



三津の渡しの由来の看板。現在は、道路として扱われている。撮影：2014年12月21日

★三津浜地区の挑戦「ミツハマル」

三津浜のまちづくりに横浜を拠点とする「コトラボ合同会社」の岡部友彦さんがか
かわり始めたきっかけは、親しくしていた人が東日本大震災後に三津浜に移住した
縁だ。三津浜地区のまちの活性化事業の公募があると聞いて、それに応募し 2013
年3月頃から地域に入った。

中心事業は古民家の調査とその活用で、「三津浜町屋バンク」（ミツハマル）を創設
し、古民家のあっせんを進めている。この地域は震災を受けず、古民家が相当数残
ってはいるが、相続関係で壊される古民家も年間 10 か所程度ある状況となってい
た。調査で1軒ずつ訪ねるが、世代が交代し関東や関西圏に移住してしまい、使わ
れていない物件も多く、登記簿を取り寄せて確認する作業から始めなくてはならな
い。また、連絡先不明の人もいて、調査自体が難航することもあった。

仕事の拠点として借りた場所も築 150 年の古民家。事業の「ミツハマル」の名前は、
「三津浜にはまる」と語呂合わせだ。古民家の持ち主と借主のマッチングをはじめ、
2年弱で登録物件 10 軒、内 7 軒の借り手が決まり、三津浜に移住してきている。
町を案内してくれた地元出身の田村祐子さんは砂絵アーティストで、東京で暮らし

仲原正治

の

まちある記



昭和時代の木造建築が並ぶ町並み

撮影：2014年12月21日



築150年のミツハマルの事務所は、一日限定のショップで賑わっていた。

撮影：2014年12月21日



旧濱田医院には立派な中庭があり、一部洋館が併設されている。

撮影：2014年12月21日



町を歩くと、ミツハマルが作成した案内看板が数多く設置されている。

撮影：2014年12月21日

ていたが、愛媛が恋しくなり、地元に戻り活動している。東京の店をたたみ、レストランを経営している人もいる。活動から2年弱だが商店街では新しく店をオープンさせる人やアート・音楽系の人も少しずつ集まってきている。岡部さんたちはミツハマップ（地図）の作成や、町の案内板を作る作業もしているが、港町で造船所や製材所、鉄工所もあり、その人が手伝ってくれるようにもなっている。

いま、一番の課題は、旧濱田医院という約400㎡ある洋館の再生だ。空き家は近隣にとっては迷惑施設で、雑草や防犯などで苦情が多い。そのため、庭の手入れや外壁の塗装などを進め、見る目を変えてもらうような工夫もしている。改築には、1000万円規模の費用がかかるが、資金が足りないため、ワークショップで障子の張替えや家具づくり、ガラス戸アレンジなどを行い、少しずつ直している。岡部さんの構想では、「三津浜まちごと Hostel 計画」で、飲食店などとのネットワークを充実させて、定住者だけではなく観光客を呼び込むことも考えている。ただ、宿泊施設は法的な規制が強いので、特区などの活用で柔軟に対応できないかを行政に打診していきたいと話していた。



左：大正後期に作られた旧濱田医院の外観。撮影：2014年12月21日



右：蔵を活用したアウトレットの店「ROPA」。音楽ライブも行われる。撮影：2014年12月21日

★三津浜を歩く

田村さんに最初に案内されたのは「鯛メシ」の「鯛や」。ここには「三津浜資料館」も併設されている。建物は1929年（昭和4年）築で、登録有形文化財に指定されている。庭は1834年（天保5年）に作ったものを保存している。江戸時代は萬（よろず）問屋で、あらゆる種類の商品を扱っていたと聞いた。当時の主人が俳句好きで、殿様も俳句好きでよく立ち寄り、参勤交代時には三津浜から瀬戸内海を渡り、陸路で江戸へ向かったが、その時にも立ち寄っていたと聞いた。彼は三津浜の生き字引のような人で、昔の様々なことを話してくれ、家訓は「楽しきかな」と扁額を指して楽しそうに語ってくれた。



登録有形文化財に指定されている「鯛や」
撮影：2014年12月21日



「鯛や」の中庭は、江戸時代からほとんど変わっていない。
撮影：2014年12月21日

鯛飯の香りに後ろ髪をひかれながらも、昼食の予約をしていなかったため、向かった先は「三津浜焼」の「日の出屋」。12時少し前に店に入ったが、ひっきりなしにテイクアウトの電話がかかってくる。うどんかそばが入るお好み焼きなので、広島焼きとの違いを聞いたが、主人は無言で鉄板と格闘していた。三津浜地区には30軒ほどの「三津浜焼」の店もあり、B級グルメとしては逸品だ。旧アーケード商店街には、土曜日営業のパン屋やカフェ、イタリアンの店など個性ある店がポツポツ集まっている。みんな稼ぐというよりも楽しんで商売している感じがする。

政府は今年度の補正予算で消費を喚起し生活を支援していく経済対策で「ふるさと名物商品券」や「旅行券」などの発行について市町村に交付金をだすという。また、長期的に地方の人口減を食い止める施策やアイデアに対しても交付金を出すと聞いている。これは若者の移住や企業の誘致のアイデアを市町村が作成し、国が認めた場合に交付金を出す仕組みだ。こうした交付金は都道府県が取りまとめ、国に申請することが多く、審査も迅速性を欠き、手続きが煩雑で単年度に限られるなどの制約がつく場合が多い。もっと柔軟で継続的に住民や自治体が動きやすいものにしていく必要がある。専門家が公募された案件を審査し、効果・実態をチェックし、継続的に補助金を出すような仕組みにしてほしい。

三津浜地区の動きは、今後のまちづくりの基礎となるもので、地方の再生にはこうした場所に光を当て、補助金などを出していくことが重要だ。「金で買えない豊かさ」を追求することで、人々が地方で生き活きと暮らし、その豊かさを求めて人が集まってくる。それが地方の再生の一步ではないだろうか。

左：「鯛や」家の中の額には「楽しき哉」という家訓が。
撮影：2014年12月21日

右：「日の出屋」では次々に三津浜焼が焼かれている。
撮影：2014年12月21日



4) 越後・妻有と横浜

文化芸術でまちづくり



中之条ビエンナーレ 2013
藤原京子作品
撮影：2013年9月30日



福島ビエンナーレで展示された
ヤノベケンジ作「サンチャイルド」
(放射能防護服を着た子供)
撮影：2012年8月12日



東日本大震災をテーマにした
愛知トリエンナーレ 2013
ヤノベケンジ作「サンチャイルド」
撮影：2013年9月8日



越後妻有地区には、こうした
棚田が多くあり、農作業も難
しい。こうした場所に作品を
設置している。イリヤ/エミ
リア・カバコフ「棚田」
撮影：2012年8月10日

毎年、日本のどこかでトリエンナーレとかビエンナーレという名前の芸術祭が開催されている。トリエンナーレは3年に1度、ビエンナーレは2年に1度に行われる現代アートの芸術祭を指す。古くは100年以上前から続いている「ベネチアビエンナーレ」を筆頭に、世界ではいたるところで現代アート展が開催されている。

近年、日本の大都市では横浜、名古屋、札幌、新潟などで、地方では越後・妻有、瀬戸内、別府等で大々的に、中之条など中小の都市や農村部でもさまざまな芸術祭が行われている。この芸術祭の開催は、衰えることを知らずに、京都、さいたまなど、主要都市での開催が続いている。

こうした芸術祭の意味合いとどのような効果をもたらしているのか、なぜ、自治体はこうした芸術祭を開催しようとしているのかを考察する。

★ 中心市街地活性化法では、まちの再生はできなかった。

高度成長期からバブル経済にいたる中、地方の中心市街地の商店街が郊外型ショッピングセンターやバイパス沿いの店舗開発により廃れ、シャッター商店街といわれる地域が多くなった。農村部では過疎化と高齢化により、住民の50%以上が65歳以上になる限界集落と呼ばれる生活困難地域までもでてくるという現実がある。こうした問題に対して、地方都市では国の中心市街地活性化法により「TMO(タウンマネジメントオーガニゼーション)」を商工団体等がつくり、地域の活性化を進めたが、一部を除いて、成功例はほとんどなかった。

一方、アーティストやクリエイターの創造力やコミュニケーション能力で地域の活性化を進める手法(クリエイティブシティ政策)がヨーロッパで成功し、日本では2000年に開催された過疎化地域である越後・妻有地区で行われた「大地の芸術祭」の成功を踏まえ、それを参考にまちづくりを進めようとする機運が盛り上がってきた。観光客の増加を求め、地域の活性化を図っていこうとする政策の一環として、様々な都市でトリエンナーレ等が開催されるようになっていく。

★ 「大地の芸術祭」は産業振興であり雇用の創出である。

新潟県十日町市とその周辺の妻有地区は、「魚沼産こしひかり」を代表とする日本有数の米どころだが、冬は日本一の豪雪地帯で、過疎化と高齢化が進み、地域は少しずつ衰退をたどっていた。



大地の芸術祭 2000
藤原吉志子作品「レイチェル
カーソンに捧ぐ」
撮影：2000年9月2日



大地の芸術祭 2000
クリスチャン・ボルタンスキ
ー作品
撮影：2000年9月2日



ファールレ立川 「見知らぬ
人」
サンデー・ジャック・アクパ
ンの作品
撮影：1994年

この地域で 2000 年に「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ」という画期的なイベントが始まった。市街地が少なく、集落も点在している農山村で、140 を超えるアート作品を展示するという、今までの美術展の常識を覆すを行ったのである。開催地は約 760 km² という広大な地域にわたり、自動車を利用しないとほとんど廻って見るができない。

これを仕掛けたのが総合ディレクターの北川フラム氏である。彼は 20 数年前「アパルトヘイト否（ノン）国際美術展」という南アフリカの人種差別反対のアート展を日本中で巡回し、その後、立川駅前の再開発事業「ファールレ立川」で路上に多くのパブリックアート作品を展示するなど、日本のアートプロデュースの草分け的な人物だ。

北川氏は新潟県高田市出身で、日本の風土や歴史、地域の伝統芸能など、日本の本来持っているエネルギーや生き方をアートを通して再認識し、大都市一極集中によってゆがめられてしまった日本のあり方をもう一度再考させようと考えているのではないと思われる。

大地の芸術祭（2000 年）を始めるにあたって、北川氏は 1000 回以上の説明会、対話をしたと語っていた。現代アートという一般人には未知で、わかりにくいイベントを行うのだから、まずは相手に理解してもらうことが必要だった。彼の考えていたことは、アートという狭い領域ではなく、アートを通しての地域づくりであり、里山から見える地球環境であつたに違いない。このイベントに全国から 16 万人もの人が訪れることになるとは、だれもが予想もしなかった。

また、北川氏は作家にも作品づくりに当たっては、地元との会話を優先させ、地域との協働作業を行い、それを繋いでいく管理運営者にボランティアが入っていくことを進めた。これが「こへび隊」といわれるボランティアグループだ。東京から貸し切りのバスを仕立てて、毎週、現地に入っていくのである。

★地域が気づかないことをアーティストが発掘し、新しいコミュニティを形成

大地に芸術祭でいくつか印象的な作品がある。一つは北山善夫氏の作品で、市街地から離れた廃校で、学校にある写真や卒業時の答辞や絵画などを組み立て、その地域の過去と現代を自分の作品を通して結びつけたのである。記録を紐解き、記憶を呼び起こす作品は、見に来た人だけではなく、地域の人にとっては、自分の地域を見直す契機となっていく。昔から造っている自分の作品と地域の素材を使った作品とが廃校の中でアンビバレントな調和を持っていて、都会の鑑賞者にとっても刺激的だった。また、廃校がたくさんあり、地域の高齢者にとっては、思い出の場所であるため、廃校を地域と協働で、制作の場にし、展示場にすることにより、「たまり場」を復活させていくことも行われているように感じる。

仲原正治

の

まちある記

もう一つは「繭（まゆ）の家」という昔の建物をつかった作品だ。蓬平集落では昔から桑を育て蚕を飼い、繭の生産をしていたが、十数年から途絶えていた。2006年にここにアーティストが入り、繭を使った作品を作り始めたのである。この作品を作るためには繭が必要で、蚕を育てることからはじめなくてはならない。そのため、十数年ぶりに1万匹の蚕が育てられた。その後も集落と作家の古巻和芳＋夜間工房は地域と養蚕活動を継続し、2009年には蚕の糧となる桑の150本の苗が植えられた。かつてこの地域で行われていた「養蚕風景」が蘇りつつある。

繭の家に行くと近隣の高齢者が作品の管理をしていて、お茶と自宅で作った漬物を出してくれ、いろいろな会話を楽しめる。すごく心地よい空間になっている。アーティストとボランティアと地域の高齢者との新しいコミュニティが少しずつ地域の子供や大人たちを巻き込んでいく姿は、今までのアート作品とは異なった側面を見せてくれた。

「大地の芸術祭」では、ひとつひとつの作品にその土地の歴史の積み重ねを思い起こし、物語を紡ぐ作業が行われ、それが地域の人を巻き込み、地域にとってもかけがえのないものになっている。それに接する都会人も、こうしたコミュニケーションや場が心地よいものに感じる。そんな「場」と「繋がり」がこの場所にはできている。

左：北山善夫の「死者へ、生者へ」
撮影：2000年9月3日

右：旧中津峡小学校の校庭に設置されている「本間純」の作品「Melting Wall」
撮影：2009年8月8日



★新潟中越地震の復興の作品づくり

2004年10月に発生した新潟中越地震（山古志村が甚大な被害を受けた）で、越後地域も大きな被害を受けている。部落自体が限界集落化して、存亡の危機に瀕した願入（がんにゅう）地域では、建築家、陶芸家、料理人などが入り込み、被災した

左:「うぶすなの家」の外観、多くのアートSツアー客が訪れる。

撮影:2012年8月9日

右:「うぶすなの家」内部。陶芸家の作った竈などがあり、ここで食事ができる。

撮影:2012年8月9日



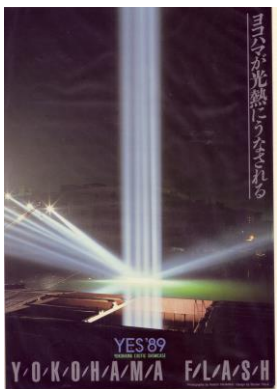
新築されたオーストラリアハウス

撮影:2012年8月9日



冬の大地の芸術祭も行われている。常設されている「草間彌生」の作品

撮影:2010年1月



1988年に行われた「ヨコハマ・フラッシュ」ポスター

家屋をギャラリーと食事処として復活させた「うぶすなの家」を作っている。ここでは、集落の人が中心となって地元の野菜などを使いながら、ヘルシーで美味しい食事をつくり、客に提供している。ここができたことで、就業の場となり、事業の採算性もきちんと取っていることで、人が定着することができている。



2011年3月12日(東日本大震災の翌日)に発生した長野県北部地震(栄村大震災・震度6強)でも、新潟県津南町周辺は大きな被害を受け、相当数の作品がダメージを受けた。特にオーストラリアハウスの家屋は壊滅してしまった。そこでオーストラリア大使館と大地の芸術祭事務局は協働で新しいオーストラリアハウスの建築に動き始めている。ここでは、自然の力を十分に享受して地域を支えていく活動と同時に、自然の驚異との戦いがいつも行われている。

こうした作品、一つ一つに思い入れや地域との協働などがあり、それが地域にも受け入れられ、地域の高齢者の励みになり、少しずつ若者が定着していくことになっていくのではなかろうか。

「大地の芸術祭」は3年に1回、大規模で開催されるが、中間年にも毎年、さまざまなイベントが開催されている。来年が大規模開催年だが、今年の夏も「越後妻有大地の祭り 2011 夏」が行われる。このイベントは一過性のものではなく、産業振興、雇用までにつながる地域活性化のためのものとして確立してきている。

★ ヨコハマ・トリエンナーレは国と協働の国際展を目指してきた

横浜では2001年から国際現代美術展として「横浜トリエンナーレ」が開催されている。当初から外務省の外郭団体である国際交流基金と横浜市の共同事業として始まった。当時、日本では国が関与する国際的な現代アートの美術展が存在せず、世界に通用する現代アート展を開催していくことが、国としても必要だという観点から始まった。

横浜市は1970年代から都市デザインを中心に街づくりをすすめ成果を上げてきた



横浜博覧会の跡地で開催された「バルセロナクリエーション」

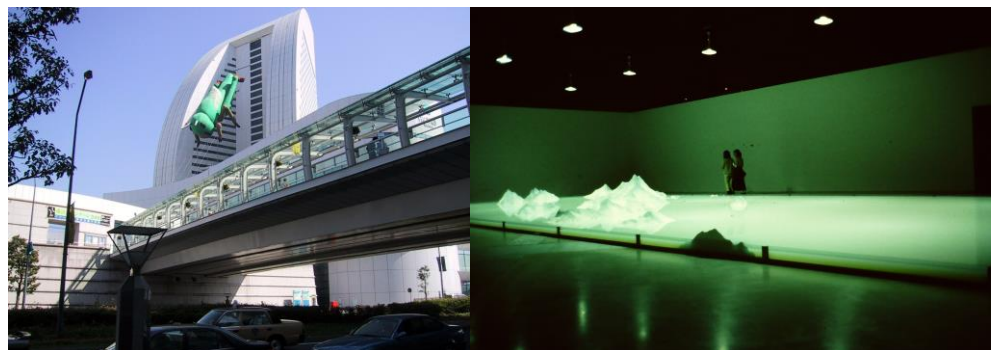
撮影：1990年5月



「NICA F (国際コンテンポラリーアートフェア)」のカタログ。現在も、アートフェア東京という名前で続いている。

左：横浜トリエンナーレ 2001
作品「飛蝗」椿昇+室井尚
撮影：2001年9月

右：横浜トリエンナーレ
2001 作品、マリール・ノイデッカー「思い出せない今」は
冰山を塩で作ったが、塩害が
心配され途中で撤去された
撮影：2001年9月



★空き家を活用することで現代アートが「まちに広がっていく」

2008年の横浜トリエンナーレの時に、同時期に行われたアートイベント「黄金町バザール」が街の中で、空き家や空きオフィスを活用して、そこをアトリエや展示場に変えていくことを本格的に始めた。ここでは「大地の芸術祭」と同じように、作品に物語が付随することを大切にして、売買春宿が多数集積していた課題のある地域で、少しずつ地域の再生を目指すなど、現代アートを鑑賞するという以外の要素が出てきている。空き家や空きオフィスを活用する方法は、2010年の愛知トリエンナーレ「長者町地域」でも成功を収めたが、こうした街から少し見放された場所をアーティストやクリエイターの活動場所に変えていくというプロジェクトは、街の活性化のひとつの手法として、今後も続いていくと思われる。

仲原正治

の

まちある記



愛知トリエンナーレ長者町
会場「浅井裕介」の作品
撮影：2010年8月20日

左：ヨコハマトリエンナーレ
2011 作家「ウーゴ・ロンデ
イノーネ」
撮影：2011年7月30日

右：ヨコハマトリエンナーレ
2011 作家「島袋道浩」の「人
間性回復のチャンス」
撮影：2011年7月30日



新・港村のクロージングパー
ティ
2013年11月1日



「OPEN YOKOHA
MA」案内書

ヨコハマトリエンナーレ2011(会期:8月6日~11月6日)が始まろうとしているが、
昨年の民主党の事業仕分けの結果、国際交流基金が主催者から下りたこともあり、
国が目指す国際美術展から、地域の活性化も視野に入れた芸術祭に転換しようとし
ている。「まちに広がるトリエンナーレ」というキャッチフレーズが表すように、
積極的に街と組みはじめている。特に、クリエイティブシティ・ヨコハマを牽引し
てきた BankART(新・港村)や黄金町バザールと共通チケットをつくり、同時期に行わ
れる 50 以上の芸術文化イベントが連携して、横浜の関内・関外地域全体がアート
で彩られるようになった。鑑賞型のふつうの国際美術展から参加を含めた地域活性
化の芸術展への変わってきているのだ。



BankART(新・港村)では 85%の節電を目指すとともに、被災地と横浜を結ぶバスを
走らせ、黄金町バザールでは石巻市内に拠点を設け、地域との協働作業で、復興の
まちづくりの手伝いを行うなど、昨今の電力事情や被災地の支援を意識して、事業
を進めている。

また、このトリエンナーレと連動して、元町、中華街、伊勢佐木などの商店街も参
加する「OPEN YOKOHAMA」事業が並行して進められ、300以上の催
事が紹介され、期間中、街全体が祝祭都市として、多くの観光客を迎え入れよう
としている。東日本大震災後の自粛ムード、電力事情など、さまざまな課題はあるが、
自分の住み暮らす横浜を元気にすることで、日本を元気に、被災地を元気にしてい
くことを目指している。

★地方が元気にならないと、日本は滅びる

歴史、風土、気候など地域性が異なる農山村部の妻有地域と大都会の横浜で同じよ
うな発想や手法で、地域の掘り起こし、地域の活性化のための事業が進んでいる。
こうした動きは、さまざまな都市にも波及している。

仲原正治

の

まちある記

大地の芸術祭と瀬戸内芸術祭の総合プロデューサーの福武総一郎氏は、「瀬戸内のイベントはアートの展覧会ではない。日本の原風景のなかで、現代アートを通して、地域のお年寄りが元気になり、みんなが地域のために動き、地域が活性化することを目指している」という趣旨のことを語っている。

北川フラム氏は「瀬戸内では、ひとりのおばあちゃんが自販機で買ってきたジュースを発砲スチロールの容器で冷やし。自宅の庭先で、購入金額と同じ値段で売り始めた。島を訪れた人と交流するきっかけが欲しかったのです。」と発言している。
(2016年6月11日朝日新聞朝刊)

瀬戸内芸術祭で島を巡った時に、スイカを用意してくれた場所もあって、私もそこで、いろいろな話をしたことがあった。印象に残っているのは。瀬戸内海をイノシシが泳いで島にやってきて、イノシシ被害が出ていると聞いたことだ。そこで、いわきの自宅付近のイノシシ被害などを話し、話を共有した記憶がある。

北川氏は「私が芸術祭の仕事を引き受けたのは、効率が優先される現代社会で切り捨てられる地方や、農業・漁業を生業とする人々の誇りと元気を取り戻したいと考えたからです。」(2016年6月11日朝日新聞朝刊)

日本が震災に会い、電力不足などで産業自体が疲弊していくことが予想される。こうした中で、大都市集中の産業構造や大都市中心に物事が動く仕組みでは国が持たないのではないだろうか。もっと細やかに地域に入って、地域を元気にしていくことで、日本は今までと違った意味で、持続ある社会になっていくのではないだろうか。



島の必需品である、荷物を運ぶキャリー者もアート化されている。
撮影：2010年7月19日

上左：瀬戸内芸術祭 2010 オープニング。シャボン玉は大巻伸嗣
撮影：2010年7月19日

上右：草間彌生「赤かぼちゃ」
撮影：2007年3月22日



仲原正治

の

まちある記

左：瀬戸内の島々を使ったイベントでは海辺にも多くの作品が展示されている。
撮影：2010年7月20日

右：大岩オスカル作「大岩島」
撮影：2010年7月19日



仲原正治
の
まちある記

「仲原正治のまちある記—アートでまちづくり編」

著者：仲原正治

発行：2016 年 6 月

「仲原正治のまちある記」は日経ＢＰ社「ケンプラッツ」の記事を加筆・訂正したものです。この文章及び写真（提供写真を除く）については、出典さえ明らかにしていただければ「著作権フリー」です。

仲原正治（なかはら まさはる）略歴

(株)M Zarts クリエイティブ・ディレクター(陶磁器・現代アートギャラリー)

1949 年東京生まれ。 1974 年東北大学法学部卒業。

文化芸術によるまちづくり及びクリエイティブシティ政策の専門家。

2011 年 4 月から 2015 年 12 月まで、日経ＢＰ社の総合サイト「ケンプラッツ」に「まちある記」を連載。全国の中心市街地、東日本大震災の被災地のレポートなど、特徴あるまちづくりを紹介している。

主な著書：「横浜市創造都市事業本部 2586 日の戦い」（インターネット出版）。

現在、ＮＰＯ法人黄金町エリアマネジメントセンター理事、赤煉瓦ネットワーク通信員。